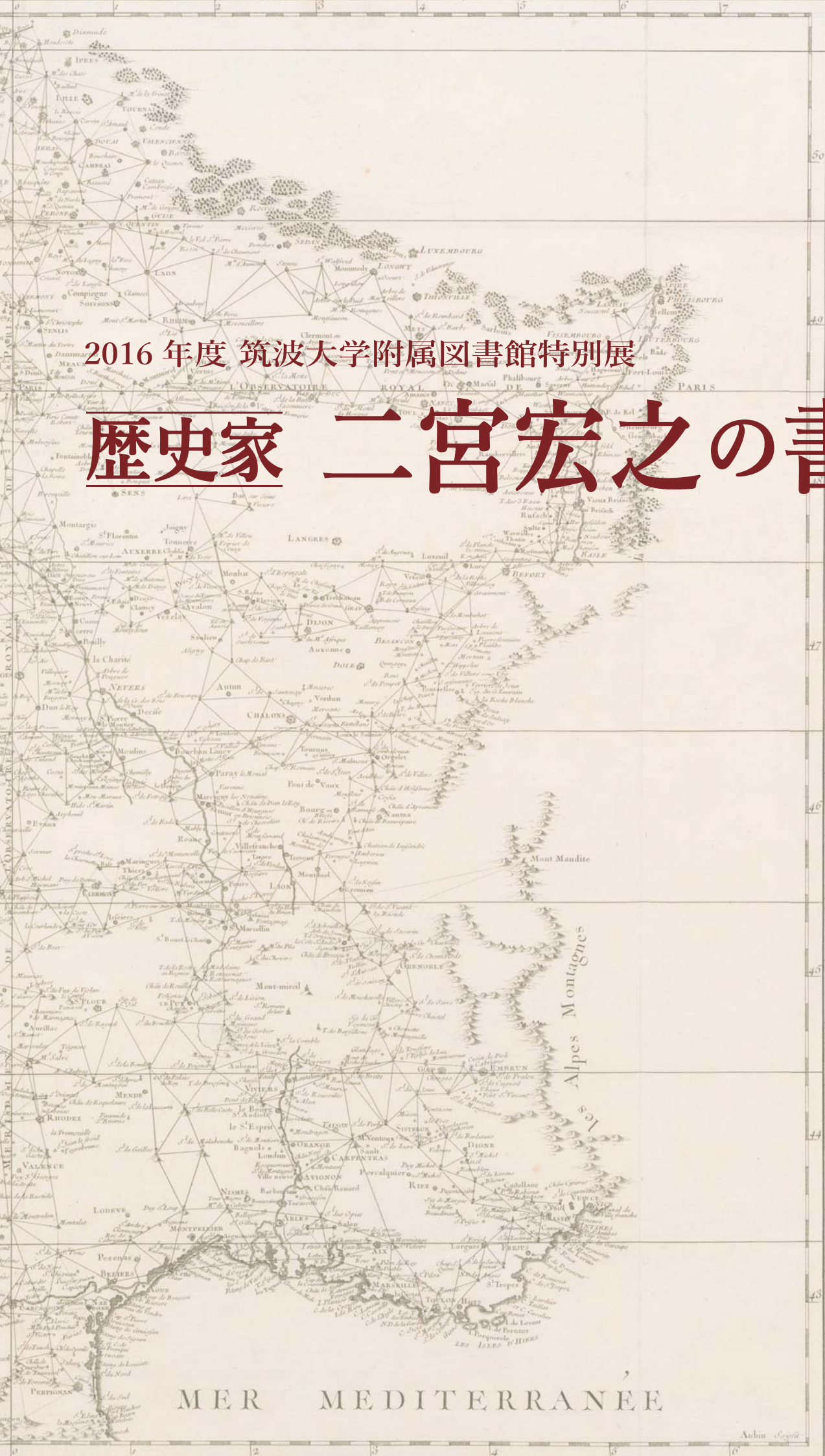
2016 年度 筑波大学附属図書館特別展

歴史家 二宮宏之の書棚



2016年度 筑波大学附属図書館特別展

歴史家 二宮宏之の書棚

会期　2016年10月11日（火）～ 11月13日（日）
会場　筑波大学附属図書館（中央図書館一階貴重書展示室）
主催　筑波大学附属図書館／人文社会科学研究科

凡　例

1. 本書は2016年度筑波大学附属図書館特別展「歴史家 二宮宏之の書棚」(会期：2016年10月11日(火) ～ 11月13日(日))の図録である。
2. 本図録に掲載されている資料は、特に記載のない限り筑波大学附属図書館が所蔵する。また、図及び写真は、特に記載のない限り執筆者が作成したものである。ただし、岩波書店刊行の書籍については、書影を岩波書店にご提供いただいた。
3. 本書の図版番号は、展示資料の番号と一致するが、展示の順序とは必ずしも一致しない。また、一部の展示資料については、本図録への掲載を割愛した。
4. 掲載資料の標題等の書誌情報や解題等の漢字表記は、原則として通行の字体に改めた。
5. 本書の解説は、二宮素子（元・共立女子短期大学教授）、林田伸一（成城大学教授）、高澤紀恵（国際基督教大学教授）、津崎良典（本学准教授）が執筆し、津崎良典、筑波大学附属図書館研究開発室（谷口孝介・山澤学）および特別展ワーキング・グループで編集を行った。
6. 執筆者の署名については、MN（二宮素子）、SH（林田伸一）、NT（高澤紀恵）、YT（津崎良典）で表示している。
7. 二宮宏之氏の写真のデジタル化に当たり、（株）堀内カラーの協力をいただいた。写真は、二宮素子氏にお借りした。
8. 表紙に使用したのは、フランス国立図書館（BnF）蔵、セザール＝フランソワ・カッシーニ等作の「新フランス地図」（1744）である。

目　次

附属図書館長ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

人文社会科学研究科長ご挨拶・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

プロローグ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・6

第一部　歴史家の肖像（ポルトレ）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7

第二部　歴史家の仕事（メチエ）

　第一章　「「印紙税一揆」覚え書」
　　　　　――ブルターニュ地方農民叛乱からフランス大革命へ・・・・・・・・・16

　第二章　「フランス絶対王政の統治構造」――生活世界から権力秩序へ・・・・・・21

　第三章　「王の儀礼」――権威と権力、そして「読解の歴史学」・・・・・・・・・・25

　第四章　歴史における日常性と権力――ニコラ・ドラマールとその周辺・・・・・29

　第五章　『マルク・ブロックを読む』
　　　　　――土地から村、村から村人へ、あるいは歴史家の晩年の仕事（メチエ）・・・34

掲載資料一覧・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・36

二宮宏之・略年譜・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・38

附属図書館長ご挨拶

附属図書館では、これまで学内組織の協力を得つつ、本学が所蔵する貴重資料などを広く公開する展示事業を行ってきました。今回の特別展は、人文社会系の津崎良典准教授（フランス哲学）のご指導のもとに、附属図書館と人文社会科学研究科との共催により、「歴史家 二宮宏之の書棚」と題して開催するものです。

本学の附属図書館には、約八〇の文庫があります。そのなかで最新かつ最大のものが、歴史家・二宮宏之氏の旧蔵書、二宮文庫に他なりません。二宮氏は、長らく東京外国語大学で教鞭をとられ、専門領域であるフランス絶対王政期の国制史や思想史に加え、フランス革命史や社会史について珠玉の論攷を世に問うてこられました。その過程で役立てられた洋書約九〇〇〇冊から二宮文庫は成り立っています。関連領域の主要二次文献を網羅しているのみならず、一六世紀から一八世紀にかけてヨーロッパ各国で刊行された王令・法令集などの貴重な一次資料が数多く含まれています。附属図書館では二宮家での配置をほぼそのまま踏襲しており、二宮史学の全容を俯瞰することができます。

二宮文庫の受入調整役は、本学の立川孝一名誉教授（フランス史学）が在職中の 2008 年に引き受けられ、津崎先生に引き継がれました。当初附属図書館では、植松貞夫旧図書館長が相談を受けましたが、中央図書館耐震改修工事がありすぐにお引き受けすることは出来ませんでした。本格的な受入作業は、2012 年、中山伸一前図書館長の時代に開始されました。その後、膨大な冊数におよぶ旧蔵書の受入には長い年月を要しましたが、二宮氏の歿後一〇周年という記念すべき年に全ての受入作業が終了しました。

本特別展の実現は、多くの関係者のご尽力の賜物であります。とりわけ『二宮宏之著作集』の刊行元である岩波書店からは後援を受けることができました。二宮氏の歿後、著作集の編集にあたられた岩波書店編集部の杉田守康氏には、岩波書店が所有する関連貴重資料を貸与いただきました。深く御礼を申し上げます。

本特別展を通じて多くの方に、我が国の人文科学と社会科学の発展に必ずや貢献するであろう二宮文庫の意義をご理解いただければ、附属図書館長としてこれに優る歓びはありません。

2016年10月
附属図書館長　西川博昭

人文社会科学研究科長ご挨拶

戦後日本の西洋史学を牽引した二宮宏之氏は、フランス絶対王政期の国制史、社会史、そして思想史を専門としました。2012 年、その旧蔵洋書の大半が筑波大学附属図書館に寄贈されました。

本特別展ではそれらのなかから、二宮氏が研究の過程で実際に繙かれた稀覯書を中心にご覧いただきます。とりわけロワゾー『官職論ならびに権力論、身分論』やゴドフロワ父子『フランス儀典書』といった一七世紀に刊行された書物、ドラマール『ポリス提要』やドゥリ『王国年鑑――1789 年版』といった一八世紀に刊行された書物は、フランス史学における最重要資料であります。是非ご堪能ください。

寄贈書のなかには、我が国の他の大学図書館には所蔵されていない書物が数多く含まれています。私どもは、この貴重な二宮文庫の恩恵を受け、本学における研究と教育がいっそう充実したものになると喜んでおります。また、すでに学外の研究者からも貸出依頼が寄せられております。本文庫は、我が国の人文科学ならびに社会科学の深化に大きく寄与することでしょう。

このような喜びと楽しみを私たちに分け与えてくださった寄贈者の二宮素子夫人に、深い謝意を表します。二宮夫人は、単に寄贈を申し出られたのみならず、附属図書館の受入作業が煩雑にならぬよう細心の配慮を最大限に示してくださいました。そこには、それなしには人文科学も社会科学も決して立ち行かない「書物」というものに対する深い愛が感じられます。

展示品の選定には、谷川多佳子名誉教授（フランス哲学）をはじめ学内の有識者のみならず、二宮宏之氏と生前に深い学問的交流をもたれた歴史家たち、宮崎揚弘名誉教授（慶應義塾大学）、林田伸一教授（成城大学）、高澤紀恵教授（国際基督教大学）に貴重なご助言を賜りました。さらに林田先生と高澤先生は、本図録のために解説文を特別に寄稿してくださいました。お二人とも二宮氏から学問的訓練を受けられたわけですが、師匠の旧蔵書に解説文を執筆するという行為には、一人の歴史家の仕事が次世代に確実に受け継がれる様を見る思いがいたします。その二宮氏によって高く掲げられたフランス史学の炬火が、この特別展を機に、更に若い世代に力強く引き継がれることを期待いたします。

2016年10月
人文社会科学研究科長　山田博志

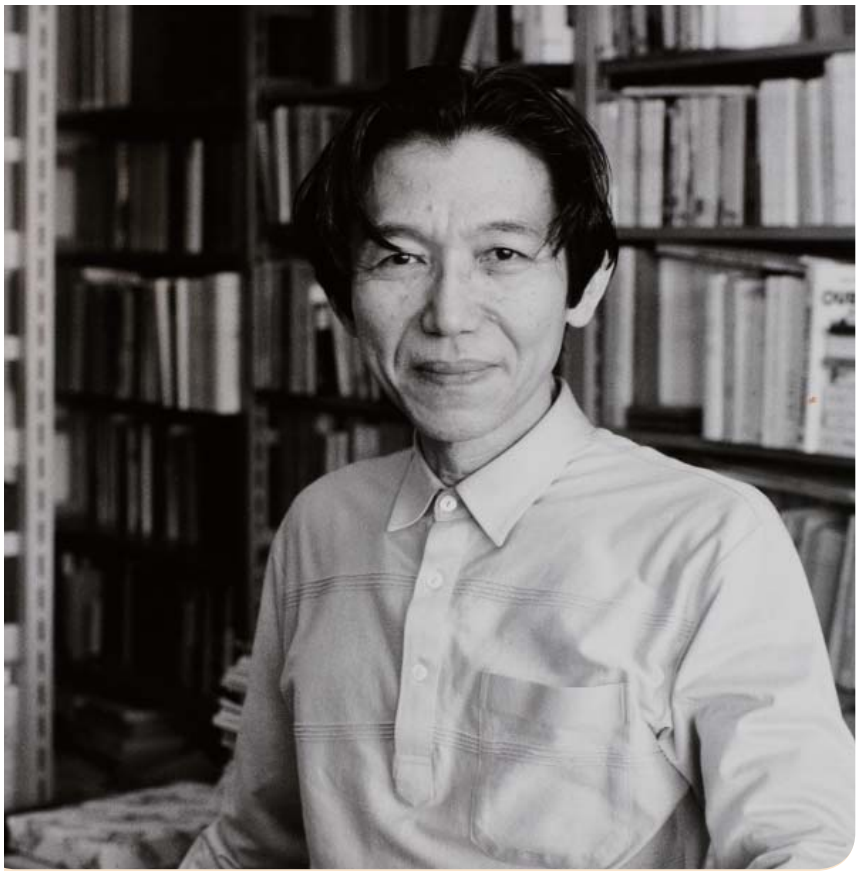
プロローグ

戦後日本の西洋史学を牽引した二宮宏之（1932-2006）の歿後一〇周年という節目に開催される本特別展は、筑波大学附属図書館に寄贈された約九〇〇〇冊に及ぶその旧蔵洋書群「二宮文庫」から稀覯書を中心に、フランス絶対王政期を専門とした歴史家の肖像（ポルトレ）と仕事（メチエ）を紹介する。

第一部「歴史家の肖像（ポルトレ）」では、歴史家の誕生と成長に迫るべく、生前の二宮が深く豊かな学問的交流をもった日本とフランスの歴史家の書物などを展示する。勉学のために字引とともに熟読した書物、友情の印として献呈され大切にした書物、日本の読者のために翻訳した書物……これらを通じて若き人文学徒が真の歴史家に変貌していく軌跡を辿る。

第二部「歴史家の仕事（メチエ）」では、二宮の代表的な論攷や著作が生み出されていく過程で役立てられた書物より、一七世紀から一八世紀にかけてフランス、イギリス、そしてオランダで刊行された王令・法令集などを展示する。歴史家は、どの史料をいかに解読することで《歴史（ヒストリー）》という《物語（ストーリー）》を紡ぎだすのだろうか。その現場を二宮が実際に繙いた書物とともに歩く。

その際に別けても注目したいのは、一六世紀から一八世紀のフランス社会における《権力》の問題だ。「王の儀礼」といった象徴的・抽象的・非日常的次元における権力の行使と、警察機構といった現実的・具体的・日常的次元における権力の行使を両極にとり、両次元を橋渡しする中間的事象として農民共同体・手工業者の団体・役人の団体などの《社会的結合（ソシアビリテ）》をおいたとき、往時のフランス社会はどのような姿を私たちに見せるだろうか。また、そういった権力への反逆としてブルターニュ地方の「印紙税一揆」に代表される農民叛乱やフランス大革命を取り上げたとき、当時のフランス人はどのような振舞いを私たちに見せるだろうか。歴史家・二宮宏之に先導されながら、これらの問いを考えていく。（YT）



二宮宏之氏（東京外国語大学研究室にて、1994 年秋頃撮影）

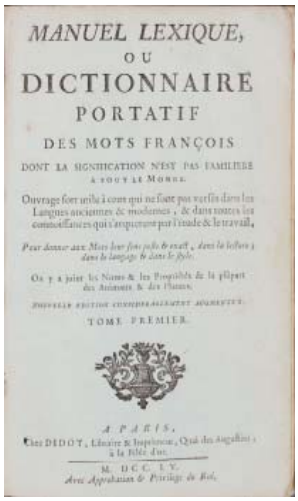
第一部　歴史家の肖像（ポルトレ）

人は歴史家に生まれるのではない。歴史家に成るのだ。それでは二宮は、いつ、どこで、そしてどのように自らを歴史家として作り上げていったのか。しかも、一六世紀から一八世紀という特定の時代の、そしてフランスという特定の場所を主要な研究対象にする歴史家として……。

歴史家の誕生には幾つかの出会いが不可欠であった。その筆頭に挙げられるのが、高校生の時分より強く惹かれ、大学の二年次に漸（ようや）く原書の入手が叶った、前世紀フランス最大の歴史家のひとり、マルク・ブロックである。そして、アナール派第一世代の領袖（りょうしゅう）でもあったブロックと学問的な交流をもった高橋幸八郎――『近代社会成立史論』（1947）や『市民革命の構造』（1950）などを掲げて戦後歴史学の旗手となったこのフランス史家は、長らく東京大学で教鞭をとり、二宮の生涯の師としてその研究を見守った。さらに東大在学中には、のちにフランス文学者として母校で教鞭をとる実兄の二宮敬とともにフランス文学者・渡辺一夫の謦咳（けいがい）に接し、彼の地への関心を強めていく。もちろん師匠の高橋からは、ジョルジュ・ルフェーヴルやアルベール・ソブールといった、フランスを代表するそれ以外の歴史家との接点を与えられた。

しかし、二宮の人生において決定的だったのは、1960年から足掛け六年をかけたフランス留学であった。その当時の指導教官は、太陽王ルイ一四世時代のフランスを専門とするジャン・ムーヴレ。また、アナール派第二世代のエルネスト・ラブルースやピエール・グーベール、そしてロラン・ムーニエといった歴史家からも学問的な訓練を授けられた。さらに、ピエール・デイヨン、ジャック・ルゴフ、そしてダニエル・ロッシュらとはともに研鑽を積み、1966年の帰国後に東京外国語大学に職を得てからは、ともに刺戟しあう同僚となった。お互いの仕事（メチエ）を単に読むだけでなく、国際学会などで活発に議論を交わし、自国に招聘して講演会やセミネールを開き、そして翻訳を通じて広く読書界と各人の仕事を共有していった。

歴史家・二宮宏之は、文字通り《文芸共和国》の住人だったのである。（YT）


MANUEL LEXIQUE,
OU
DICTIONNAIRE
PORTATIF
DES MOTS FRANÇOIS
DONT LA SIGNIFICATION N'EST PAS FAMILIERE
A TOUT LE MONDE.
Ouvrage fort utile à ceux qui ne sont pas versés dans les Langues anciennes & modernes, & dans toutes les connoissances qui s'acquierent par l'étude & le travail,
Pour donner aux Mots leur sens juste & exact, dans la lettre & dans le langage & dans le style.
On y a joint les Noms & les Propriétés de la plupart des Animaux & des Plantes.
NOUVELLE EDITION CONSIDÉRABLEMENT AUGMENTÉE.
TOME PREMIER.
A PARIS,
Chez DIDOT, Libraire & Imprimeur, Quai des Augustins, à la Bible d'or.
M. DCC. LV.
Avec Approbation & Privilège du Roi.

1. Antoine François Prévost, *Manuel lexique, ou Dictionnaire portatif des mots françois dont la signification n'est pas familiere a tout le monde*, 2 vols., Paris: Chez Didot, 1755.

『言葉の手引き――その意味が人口に膾炙（かいしゃ）していないフランス語のための携帯用辞典』（パリ、1755）。長編小説『マノン・レスコー』の作者として知られるアントワーヌ・フランソワ・プレヴォ（1697-1763）が作成したという点でユニークかつ貴重な仏仏辞書。プレヴォ師（アベ）は、最初は自分用に言葉のノートを作成していたが、当時イギリスで出版されていたトーマス・ダイチェ（Thomas Dyche）の英語辞書 *New General English Dictionary* を高く評価し、これを仏語に縮約翻案した。

仏文学者として著名な渡辺一夫の旧蔵書を、二宮が譲り受けた。渡辺一夫旧蔵書については、二宮宏之の兄で仏文学者の二宮敬が「渡辺先生の『日記』について」（『渡辺一夫著作集』第一四巻所収、筑摩書房、1977）で言及している。（SH）

2. Abbé Duclos, *Dictionnaire bibliographique, historique et critique des livres rares, précieux, singuliers, curieux, estimés et recherchés*, 3 vols., Paris: Chez Cailleau et fils, 1790.

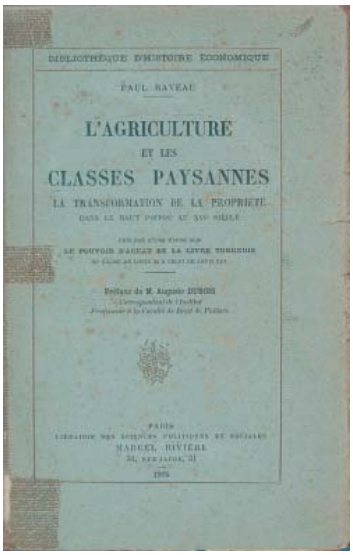
DICTIONNAIRE
BIBLIOGRAPHIQUE,
HISTORIQUE ET CRITIQUE
DES LIVRES RARES,
PRÉCIEUX, SINGULIERS, CURIEUX, ESTIMÉS ET RECHERCHÉS
QUI N'ONT AUCUN PRIX FIXE,
TANT DES AUTEURS CONNUS
QUE DE CEUX QUI NE LE SONT PAS,
SOIT MANUSCRITS,
Avant & depuis l'invention de l'Imprimerie ;
SOIT IMPRIMÉS,
Et qui ont paru successivement de nos jours, en François, Grec, Latin, Italien, Espagnol, Anglois, &c.
AVEC LEUR VALEUR
RÉDUITE à une juste appréciation, suivant les prix auxquels ils ont été portés dans les ventes publiques, depuis la fin du XVII Siècle jusqu'à présent.
AUXQUELS ON A AJOUTÉ,
Des Observations & des Notes pour faciliter la connoissance exacte & certaine des Editions originales, & des Remarques pour les distinguer des Editions contrefaites.
NOUVEL
D'UN Edit de Bibliographie, où il est traité de la Contrefaçon & de l'Auteur des Livres, de leurs divers degrés de savoir, &c. &c.
OUVRAGE UTILE ET NÉCESSAIRE
A nos Littérateurs, Bibliographes, Bibliophiles, & à tous ceux qui cultivent ces sciences, avec quelques connoissances, la lecture ancienne & moderne.
Ab uno disce omnes. VIRG. Eneid. lib. II.
A PARIS,
Chez CAILLEAU ET FILS, rue Galande, N°. 64.
M. DCC. XC.

渡辺一夫旧蔵書。(SH)

3. Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française,* Paris: Armand Colin, 1952.

マルク・ブロックの代表作。初版 1932 年刊行の本書は、発展段階と地域類型を問題関心とし、遡行的・比較的方法を用いた画期的農村史。すぐ売り切れ、日本には少部数しか入っていない。東では高橋幸八郎、西では河野健二が注目した。敗戦後の日本では、農村問題は学問的にも焦眉の課題であったから、二宮は個人で日本銀行にこの本（1952 年再版）の輸入を申請した。戦後七年を経てもドル不足により個別の審査が必要だった。手にしたときは嬉しくて撫でさすったという。邦訳は、『フランス農村史の基本性格』（河野健二・飯沼二郎訳、創文社、1959）として出版。(MN)

4. Paul Raveau, *L'agriculture et les classes paysannes*, Paris: Librairie des sciences politiques et sociales, 1926.



『一六世紀オー・ポワトゥー地方における農業と農民階級』（パリ、1926）。ヨーロッパでは、一九世紀末から物価史の研究が始まっていた。1873 年に始まったヨーロッパおよび北アメリカにおける大不況という現実を反映したものだった。この大不況においては、とくに農産物価格の長期低落が見られたから、物価史の研究も農業に関わるデータを多く蒐集して行われた。そうした研究の中でもすぐれたもののひとつが、このポール・ラヴォー（1845?-1930）のモノグラフィーである。二宮は一六世紀の土地問題を卒論の研究テーマにした。日本にはまだ西洋史に関する史料や研究書が少なかった 1950 年代において、この書物から二宮が得たものは多かった。未邦訳。(SH)

一六世紀のフランスから一七世紀のフランスへ
―― 渡辺一夫と高橋幸八郎の仕事（メチエ）を読む二宮宏之 ――

生前の二宮と親交のあった方によると、彼の歴史家としての最初の関心は、一六世紀のフランスにあったらしい。それというのも、二宮の目にこの時代は次のように映ったから――絶対王政の確立を目指して王権が伸長していく一七世紀は、政治的にも経済的にも社会的にも統一化や画一化が図られ、いわば上からの押し付けが様々な局面で強まっていったのに対して、一六世紀のフランスにそのような動きはまだ弱かった、と。このことは例えば、二宮がその生涯の長い時間を解読のために捧げた一次資料のフランス語についても当てはまる。一般に中世フランス語とみなされ、一六世紀になっても使われていたフランス語は、現代のフランス語に慣れ親しんだ者にとってはむしろ容易な一七世紀のフランス語に比べると、音韻面でも語彙面でも文法面でも些か混乱したところがあり、統一化や画一化の動きからは遠かったからである。

このように政治的にも経済的にも社会的にも、そして文化的にも多様な動きのあった一六世紀という時代のフランスに二宮が関心を深めていったのは、東京大学で教鞭をとっていた渡辺一夫と高橋幸八郎のおかげであった。二宮は両人について、1956 年の冬、つまり二三歳のときに紀伊國屋書店の新刊紹介誌『机』に寄稿した小文「十六世紀の歴史像」のなかで次のように書いている（のち『二宮宏之著作集』第四巻、岩波書店、2011 に収録）。「日本での十六世紀〔ママ〕フランスの研究には、云ってみれば二つの大きな分野があった」。その一方は「思想や文学に関する渡辺一夫氏を中心とする諸々の研究」であり、他方は「高橋幸八郎氏を初めとする社会経済史の側からの研究」である。

渡辺一夫を主軸に組織された、一六世紀フランスの「文学や思想の研究」は、なるほど「歴史学として示されたものではない」。とはいえ「フランスの歴史学が、ルネサンスとレフォルム〔宗教改革〕の世紀としての十六世紀について果して来た数多くの研究成果」を「広く吸収」し、かつ「咀嚼」するものであったと評している。しかも「この世紀の具体的な事件や人物の顔立ちが、いくらかでも親しいものとなっているのは、これらの研究に負うところが甚だ大きいと云わねばならない。そしてその中からくっきりと浮かび上って来る十六世紀の像は、宗教上の不寛容の時代にあって、「自由検討の精神」を核心とするルネサンス・ユマニスムが担った苦難の歩みであり、そのユマニスムの精神は、歴史の底流として遠く現代にまで連なるべきものだった」とも書いている。

それに対して、一六世紀フランスに関する「社会経済史の研究成果は又独自なものであった」。高橋幸八郎の研究をひとつの契機として「十六世紀は「領主制の危機」が再編成される劃期（かっき）として把握され、封建制から資本制への移行に当っての絶対主義成立期として、独自の意義を附与されて来た」という。しかも「この様な分析の視角は、フランス歴史学には殆ど欠けていたものであるだけに、とりわけ貴重だったと云わねばならない」と評している。しかし、この寸評は或る留保をつけたうえでのことである。なぜなら「この批判的検討の核心をなす、「ブルジョア」という概念の批判、それに伴う絶対主義評価の転換は、必然的に、その描く十六世紀の歴史像を極めて独自なものとした」から。

二宮によれば、渡辺一夫と高橋幸八郎によってそれぞれ代表される研究は「共に十六世紀を対象にしながらも、いわば場を異にして並立しているように思われる」。それどころか「鋭い対立を内包」してさえいた。二宮はそのようななか、この両人によって示された二つの歴史像をいわば弁証法的に統合しながら、独自の歴史像をフランスについて描き出していった。ただし、彼らによって案内された時代のフランスというよりは、むしろその次の、つまり一七世紀のフランスについてである。そのためにはしかし、もう一人の人物との出会いが必要であった。フランスの師・ムーヴレである。（YT）

5. Jean Meuvret, *Études d'histoire économique,* Paris: Armand Colin, 1971.

フランス一七・一八世紀の経済史ほとんどすべての領域で、その問題はムーヴレ（1901-1971）に聞け、といわれるほど、深くかつ該博な知識を有していた著者は、その成果を活字にすることにきわめて禁欲的で、『経済史論集』とでも訳せるこの書は珠玉の論文集である。急逝する一〇日前に刊行を見た。二宮は、パリ留学時代の演習やミュンヘン国際経済史学会のムーヴレ部会を手伝うなど信頼され、1968 年、ムーヴレがフランス政府派遣文化使節として来日した折は、滞在後半、夫妻で二宮宅の狭い家に泊まり、愉し気に談笑した。展示本は、二宮への著者献呈本。特別出展（二宮宏之蔵）。未邦訳。（MN）

留学時代の二宮宏之氏（1961 年 4 月 27 日、パリ国立文書館の帰り、ムーヴレ氏とポン・ヌフの上にて）

6. Albert Soboul, *Les campagnes Montpelliéraines à la fin de l'Ancien Régime,* La Roche-Sur-Yon: Imprimerie Henri Potier, 1958.

『アンシアン・レジーム末期におけるモンペリエの村々』（ラ・ロッシュ＝シュル＝ヨン、1958）。本書は、ソブール（1914-1982）の学位請求論文「パリのサンキュロット」とともに提出された副論文で、師ルフェーヴルの農民革命研究にならい、モンペリエのリセ（高校）教師時代に行った周辺の農村地帯の研究である。これに対して主論文は、革命下の都市パリの民衆を扱って注目を浴びた。彼は、多くの革命史家を育て、高橋幸八郎と親交を結び、もっとも早くまた重ねて来日したフランス人歴史家と言える。二宮は、留学以前から高橋の対外活動に関わり、ソブールにも親しまれていた。本書は、留学生時代の二宮への著者献呈本。未邦訳。（MN）

7. Albert Soboul, *La civilisation et la Révolution française II,* Paris: Arthaud, 1982.

ソブールには、革命期の民衆運動のみならず幅広い視点からの研究論文も多いが、一般読者むけの大著も少なくない。本書はその一例で、アンシアン・レジーム期を扱った『文明とフランス革命』第一巻の一〇年後にパリで公刊された第二巻である。後に愛嬢リュシーから送られてきたもので、彼女の献辞がある。二宮は留学時代、ソブール家に招ばれてリュシーの遊び相手をしたりした。彼女は、革命史の泰斗（たいと）である父を大変尊敬していたが、学者にはならず TV のジャーナリストになった。未邦訳。（MN）

8. Albert Soboul, *Portraits de révolutionnaires*, Paris: Messidor/Éditions sociales, 1986.

『革命家たちの肖像』（パリ、1986）。著者ソブールはいかなるマルクス主義者だったのか。本書は、ソブールが 1957 年から 1982 年にかけて講演や全集の序文など折にふれ書いた長短の文章から、弟子のマゾリックが編んだもので、フランソワ・ノエル・バブーフ（1760-1797）やルイ・アントワーヌ・レオン・ド・サン＝ジュスト（1767-1794）など誰でも知っている名前から、無名の人物まで一四人の革命家の肖像である。マルクシストはしばしば蔑称となり、教条主義者とされることにソブールはいらだっていた。だが、これらの伝記を読めば、彼がいかに人間的であったかがわかるだろう、と編者はいう。実際、ソブールはきわめて人懐こい熱い人だった。墓は、パリ北東のペール・ラシェーズの共産党墓地にある。展示本は、二宮への著者献呈本。未邦訳。（MN）

9-1. Pierre Goubert, *L'Ancien Régime,* t. I, Paris: Armand Colin, 1969.
9-2. Pierre Goubert et Daniel Roche, *Les Français et l'Ancien Régime,* 2 vols., Paris: Armand Colin, 1984.

グーベール（1915-2012）は、教区簿冊を初めて体系的に用いた学位論文 *Beauvais et le Beauvaisis de 1600 à 1730*（1600 年から 1730 年までのボーヴェとボーヴェジ）でボーヴェ地方の人口動態を明らかにして、一躍脚光を浴びた。二宮も彼の論文に魅了され、高等研究院第六部門（のち社会科学高等研究院と改組）の演習に参加し、その知遇を得た。グーベールも二宮を愛した。前者の『アンシアン・レジーム』（パリ、1969）は、一六世紀から一八世紀のフランス社会を「アンシアン・レジーム（旧体制）」と呼び、独特の視線で描いた学生用のもので、批判評も多かったが、グーベール自身もそれを意識してか、二宮への献辞に、「このフランスの辛い食べ物をあなたに」と書いている。1975 年夫人とともに来日。東京大学では「一八世紀における放浪・乞食・犯罪についての諸研究」と題する講演を行った。後者の『フランス人とアンシアン・レジーム』全二巻（パリ、1984）は、高等師範学校（エコール・ノルマル・シュペリウール）サン・クルー校でグーベールの指導を受けたダニエル・ロッシュ（1935-）による研究成果を前者に追加したもの。前者にはなかった図像資料も多く取り入れられている。二宮はロッシュの仕事を評価し、日本への招聘を何度か企画するが、様々な事情から叶わなかった。いずれも著者献呈本、未邦訳。（MN）

10. Robert Mandrou, *Introduction à la France moderne (1500-1640): essai de psychologie historique,* Paris: Albin Michel, 1974.

第二次世界大戦後花開いたフランス史学を担ったひとりマンドルー（1921-1984）の仕事の核心は、心性史であろう。『近世フランス序論――歴史的心理学の試み』と題して 1961 年にパリで刊行されたこの書は、副題からも分かるように、まず《人間の尺度》として「からだ」と「こころ」を扱い、ついで、「社会環境」「活動」と続くきわめて個性的なものである。二宮は本書から大きな刺激をうけた。1972 年、フランス政府派遣文化使節として日本に招請したのは、この新しい歴史学と日本の歴史学との交流を二宮が企画したことによる。マンドルーは明るい人ではなかったが、講演が終わって帰国直前に二宮宅で、「せ・ふぃ・ふぃ、せ・に・に（おーわった、終った）」と食卓のまわりを踊って歩いた。本書はポケット版。二宮への献呈本である。特別出展（二宮宏之蔵）。未邦訳。（MN）

11. Robert Mandrou, *De la culture populaire aux XVIIe et XVIIIe siècles: la Bibliothèque bleue de Troyes,* Paris: Stock, 1964.

本書は、青本とよばれた民衆向け廉価本の印刷地トロワに遺された史料群を分析して、民衆の心性を描こうとした画期的著作。その後さまざまな後発研究と賛否の議論がわきおこった。マンドルーが教鞭をとったパリ大学ナンテール校は、書物の社会史の一拠点となる。本書の訳者のひとり長谷川氏は、フランスの諸機関に現存する青本の閲覧・コピーの収集に尽力し、『民衆本の世界――17・18 世紀フランスの民衆文化』（二宮宏之・長谷川輝夫訳、人文書院、1988）に結実する翻訳作業に資するところ大であった。（MN）

12. ジャック・ルゴフほか、『歴史・文化・表象――アナール派と歴史人類学』、二宮宏之編訳、岩波書店、1992.

本書は、アナール派の代表的歴史家、そして二宮と生前に深い学問的交流をもったデュビー、ルゴフ、ルロワ＝ラデュリー、ビュルギエール、シャルチエらの来日講演と対談記録からなる。副題にある「アナール」とはフランス語で「年報」を意味する。幾度か誌名変更があったが今日まで刊行が続くフランスの学術誌『社会経済史年報（*Annales d'histoire économique et sociale*）』を主要舞台に集った歴史家集団をアナール派と呼ぶ。前世紀以降、歴史学に大きな影響を与え続けている彼らの特徴は、たとえばネーデルラント継承戦争（1667-1667）といった政治的事件に傾注する事件史や、ナポレオン（1769-1821）といった著名人を主軸とする偉人史とは異なり、民衆の生活文化や社会全体の「集合記憶」に注目することだ。そこで導入されたのが、経済学、統計学、人類学、言語学などの異分野の研究成果である。副題に「歴史人類学」という術語が用いられているゆえんである。

二宮はアナール派の仕事（メチエ）を日本に精力的に紹介した。しかしそれは日本の人文学研究が陥りがちな「輸入学問」では決してなかった。アナール派の歴史家たちも二宮の仕事から多くを学んだ。その意味で二宮は、真の意味でグローバルな歴史学研究に従事した数少ない例外であった。（YT）

13. Jacques Le Goff, *Pour un autre Moyen Âge: temps, travail et culture en Occident,* Paris: Gallimard, 1977.

著者のルゴフ（1924-2014）は、フランス中世史研究の雄で、1972 年に高等研究院第六部門（のち社会科学高等研究院と改組）の第三代の長となる。歴史学に民族学の成果と方法の導入を主張した 1976 年の東京講演は、ルゴフ・ショックと言われてヨーロッパ史のみか日本史研究者の間にも受容と批判が渦巻いた。翌年刊行された本論文集『もうひとつの中世のために――西洋における時間、労働、そして文化』（加納修訳、白水社、2006）は、時間・説話・夢・森と荒野など広大な主題を扱う。二宮は留学生時代、専攻する時代は異なるが大いに彼に親しみ、しばしば手料理をふるまわれ、談論風発のうちに若い世代の広い知的世界を知ることが出来た。展示本は、二宮への著者献呈本。（MN）

14. Jacques Le Goff, *La naissance du purgatoire,* Paris: Gallimard, 1981.

聖書に煉獄（れんごく）の記事はない。これは一三世紀ごろ広まった概念で、それまで教会に疎まれていた商人層の力の増大など社会変化に伴う現象と言える。1984 年に刊行されたルゴフのこの大著は非常に大きな反響を呼んだ。このころ二宮は再渡仏を果たし、家族ぐるみでルゴフの歓待をうけた。一〇歳のお嬢さんが、「パパは私を vous（あなた）で話すので、友達に笑われる」という。ルゴフは、「故郷のトゥーロンで、アルジェリア人を tu（お前）で呼ぶのがいやで、わたしは子供にも tu を使えない」と答えたのが忘れられない。ルゴフの学問の新鮮な視点とも関連するのではないか。展示本は、二宮への著者献呈本。邦訳は、『煉獄の誕生』（渡辺香根夫・内田洋訳、法政大学出版局、1988）として出版。（MN）

15. Jacques Le Goff, *La civilisation de l'Occident médiéval,* Paris: Flammarion, 1982.

著者ルゴフが四〇歳のときに出版した代表作『中世西欧文明』（桐村泰次訳、論創社、2007）の新版（パリ、1982）。中世ヨーロッパの鳥瞰図にして「虫観図」――これは二宮の造語である――として世界的ベストセラーとなり、二〇ヶ国語以上に翻訳された。第一部では、ローマ時代末期から後期中世までを通史的に描出し、第二部では一〇世紀から一三世紀を中心に主題的に《中世西欧文明》の特徴を剔抉（てっけつ）する。具体的には、中世における時間と空間の関係、教皇と皇帝の対立、技術と自然の関係、都市と農村の相違などである。展示本は、二宮への著者献呈本。特別出展（二宮宏之蔵）。（YT）

16. Jacques Le Goff, *L'imaginaire médiéval,* Paris: Gallimard, 1985.

アナール派第三世代を代表するルゴフの『中世の想像界』は、その『もうひとつの中世のために』の続編に当たる。著者によれば、或る時代の全体像を理解するためには、経済、社会、そして法律を通して見えてくる《現実》の世界のみならず、その時代の人々が何を感じ、想い、夢見ていたのか、つまり《想像》の世界も考察すべきだという。なぜなら、経済的・社会的・法律的側面は、あくまでも時代の《骨》であり、人々の想像の産物こそが《肉》だから。そこで本書が注目するのは、ヨーロッパ中世の人々が「驚異（merveille）」と感じていたもの。たとえば「オリエント」という形象である。その他に本書では、中世人の「想像界」における時間、空間、身体、夢などの主題が考察される。展示本は、二宮への著者献呈本。その一部の邦訳は、『中世の夢』（池上俊一訳、名古屋大学出版会、1992）に所収。（YT）

留学時代の二宮宏之氏（書斎にて）

17. Maurice Agulhon, *Pénitents et francs-maçons de l'ancienne Provence,* Paris: Fayard, 1984.

マンタリテ（心性）とともに、1970 年代から、ソシアビリテ（人と人との結びあうかたち）はフランス歴史学の主要な分析概念となったが、その端緒は、アギュロン（1926-2014）の 1966 年の論文『南仏のソシアビリテ』である。特有の濃密な社会関係を表現するものとして採られたこの言葉は、広く論議され、それらの批判を取り入れて再構成されたのが、本書『アンシアン・レジーム期のプロヴァンス地方における悔悛苦行兄弟団とフリーメイソン』（パリ、1984）である。1984 年 6 月、アギュロンは来日して「フランス政治史におけるイメージとシンボルの役割」などの講演を行う。二宮宅では、一八世紀初頭南仏のカミザールの乱などを論ずる。本書は著者献呈本。未邦訳。（MN）

18. Pierre Deyon, *Le mercantilisme,* Paris: Flammarion, 1969.

デイヨン（1927-2002）は、フランスの代表的経済史家のひとりで、一七世紀アミアンの研究で学位を得た。本書は、重商主義について論じた解説で著者の献呈本。標題もそのまま『重商主義』（パリ、1969）である。彼は、日本では、1980 年に社会経済史学会で行った報告「「原基的（プロト）」工業化モデルの意義と限界」（産業革命以前の地域的農村工業論。二宮宏之訳ならびに解説）などで知られる。二宮にはもっとも親しい友人であり、リール大学のデイヨンの演習に何度か呼ばれて、フルーリ領主領の問題あるいは江戸時代の日本の社会経済などを講じたこともある。未邦訳。（MN）

19. Jean-Louis Flandrin et Massimo Montanari, éd., *Histoire de l'alimentation,* Paris: Fayard, 1996.

フランドラン（1931-2001）は、遅く世に出て疾風のように駆け抜け、大きな仕事をした歴史家である。高等研究院第六部門の文明史家デュプロンのもとで長く研鑽を積み、1975 年、のちに『農民の愛と性』と題して邦訳の出た書物をはじめ、歴史的考察の域外とされていた近世フランスの性のありようを論じて学界を驚かせた。1980 年代半ばからは、《食》の史的研究を牽引するリーダーとして、本書をはじめ、大部の書物を刊行した。来日には至らなかったが、二宮は渡仏時、私宅に招かれて大いに食物史を議論し、本書を献呈された。邦訳は、『食の歴史』全三巻（宮原信・北代美和子監訳、2006）として藤原書店より刊行。（MN）

20. Jean-Louis Flandrin et Jane Cobbi, éd., *Tables d'hier, tables d'ailleurs,* Paris: Odile Jacob, 1999.

前著『食の歴史』の言わば続編に当たり、歴史学のみならず人類学と民族学を専門とする一七名の研究者による論文集。本書は、標題の『昨日の食卓、余所の食卓』（パリ、1999）からも分かるように、その研究対象を広義におけるヨーロッパだけでなく、アジア・アフリカ・南アメリカにまで広げて、飲食の歴史を辿る。ここでも編者フランドランらの、そう言ってよければアナール派的な視座は、食糧供給、食糧危機、さらには食糧飢饉に関して統計資料から見えてくる数量的事柄のみならず、ヨーロッパ圏外の人々はこれまで具体的に何時、何処で何をどのように飲食し、飲食にどのような感情を抱いていたのか、そしてヨーロッパ圏の過去における飲食習慣とどのように相違するのか、という社会史的・心性史的・比較文化史的な問いにも向かう。展示本は、二宮への著者献呈本。未邦訳。（YT）

21. ジョルジュ・リヴェ、『宗教戦争』、二宮宏之・関根素子訳、白水社、1968.

文庫クセジュの一冊として刊行された本書は、一六世紀後半フランス、カトリック対プロテスタントの抗争内乱を描いた時代史の基本文献。著者のリヴェ（1916-2002）は、二宮の恩師ムーヴレと親交があった。二宮は学生時代から、渡辺一夫のルネサンス研究、大塚史学双方に強く惹かれており、留学当初この時代の研究を志したが、史料と留学の時間的制約から断念。この訳書は、その初志と結びつく。原著は極めて簡潔で、理解を助けるため、訳者がさまざまな附録や詳細な系図を付した。原著は、1962 年に *Les guerres de religion* としてパリで出版。（MN）

22. ジョルジュ・ルフェーヴル、『革命的群衆』、二宮宏之訳、岩波書店、2007.

著者ルフェーヴル（1874-1959）は、1920 年代から始まる現代歴史学の中心的存在のひとりで、革命史研究の泰斗（たいと）。その学殖の深さ・大きさのみならず、包容力ある温かい人柄で国内外の多くの弟子に慕われたのは、ソブールやイギリス・リーズ大学のフランス革命史家コッブから聞いていた。二宮の恩師高橋幸八郎は大戦前から文通による親交があった。この書は、民衆運動史の古典。民衆運動の自発性・自立性、集合的記憶の果たす役割など、現在の主要論題がすでに指摘されている。二宮は、自らの「印紙税一揆」の分析に新しい視角を得た。原著は、1932 年に *Foules révolutionnaires* としてパリで出版。展示本は、1982 年に創文社から刊行されたものを底本として 2007 年に出版された岩波文庫。（MN）

23. ロバート・ダーントン、『革命前夜の地下出版』、関根素子・二宮宏之訳、岩波書店、1994.

革命前夜には啓蒙思想のショックはすでに吸収されていた。ヴォルテールの後継者たちは上流社会に包摂され、言うべき事柄をもたなかった。王権を揺さぶっていたのは、どん底の世界に住む三文文士の書き散らす発禁文書だったのではないか。著者ダーントン（1939-）は、1993 年ドイツを経て来日した二宮宅の食卓で、東西問題やメタヒストリー、そして、スイスで印刷された小冊子類の厖大（ぼうだい）な資料を猛烈なエネルギーで読み解いたこの書のなりたちを語った。本書はフランスでも第一級の研究として名高い。原著は、1979 年に *The Litterary Underground of the Old Regime* として出版。（MN）

第二部　歴史家の仕事（メチエ）

第一章　「「印紙税一揆」覚え書」
——ブルターニュ地方農民叛乱からフランス大革命へ

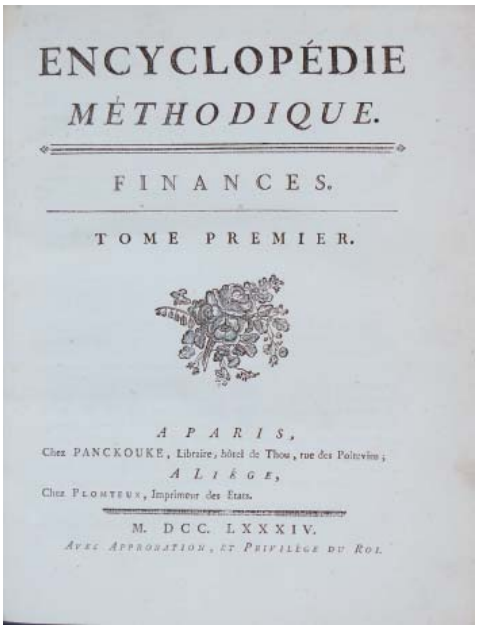
二宮は1960年代に、当時としては異例の長期のフランス留学を経験した。その期間に第五章で言及される農村史研究を行ったが、これと並行して、アンシアン・レジーム期に頻発していた民衆蜂起についても、調査を行っていた。このテーマは、旧ソ連のマルクス主義史家ボリス・ポルシュネフとパリ大学のロラン・ムーニエの間で、当時激しい論争を巻きおこしていたものだった。この論争に刺戟を受けた二宮は、ルイ一四世治下のブルターニュ地方で発生したいわゆる「印紙税一揆」をケーススタディとして民衆蜂起の研究を行ったのである。この論争はフランスを中心に数多くの民衆蜂起研究を生んだが、二宮の論文はその中でも第一級のものと言える。ジョルジュ・ルフェーヴルやロベール・マンドルーの研究から示唆を受けて農民たちの生活や意識を重視し、彼らに即して蜂起を理解することが試みられているからである。この論文は、二宮が帰国後に見舞われた重い病から回復して発表したもので（初出は岡田与好編『近代革命の研究』上、東京大学出版会、1973）、同学の者たちは二宮の回復を喜ぶとともに、その質の高さに感歎した。

「印紙税一揆」は、軍隊まで動員した国王政府によって鎮圧された。しかし、ルイ一四世末期から絶対王政にも綻びが目立つようになり、一八世紀半ばから、近代国家へと転換するための国王権力による上からの改革（地方行政改革やモプーの司法改革など）が実施された。しかし、それらの試みは挫折し、ほどなくフランス革命が到来する。フランス革命は、その直接的なきっかけこそパリのバスティーユ襲撃であったが、これが推進されたのには、王国各地の農民の動向が大きく影響していた。「ひととしての矜持は、百年後の〔フランス革命時の——引用者注〕ブルターニュ農民の胸に再び力強く甦らなかったと言えようか」、と二宮はこの論文を結んでいた。（SH）

24. Michel Sauvageau, *Coûtumes de Bretagne*, Rennes: J. Vatar, 1742.

『ブルターニュ地方の慣習法』（レンヌ、1742）。ブルターニュ地方の慣習法は中世末期の一四世紀に初めて成文化され、1480年には公刊された。その後、何度も印刷に付されたが、一八世紀に入ってブルターニュ高等法院弁護士ミシェル・ソヴァジョー（生歿年不詳）が、大法官ポンシャルトラン（1643-1727）の命を受けて、最初の版のブルターニュ慣習法を新たに印刷に付させたのが本書である。出版地がブルターニュ地方の主要都市レンヌであるところも興味ぶかい。

二宮の代表的論文のひとつ「「印紙税一揆」覚え書——アンシアン・レジーム下の農民叛乱」（岩波書店刊『二宮宏之著作集』第二巻（2011）所収）の対象である1675年に起こったブルターニュの大叛乱は、その背景にある税制や土地制度についての知識がなければ十分に理解することができないが、これらは慣習法と深く関わるものであった。（SH）


ENCYCLOPÉDIE
MÉTHODIQUE.
FINANCES.
TOME PREMIER.
A PARIS,
Chez PANCKOUKE, Libraire, hôtel de Thou, rue des Poitevins;
A LIÉGE,
Chez PLOMTEUX, Imprimeur des États.
M. DCC. LXXXIV.
AVEC APPROBATION, ET PRIVILÈGE DU ROI.

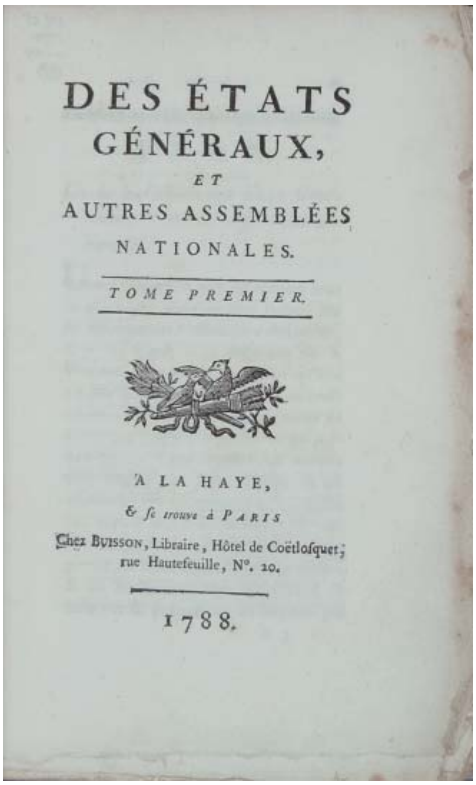
25. ***Finances (Encyclopédie méthodique, ou par ordre de matières, par une société de gens de lettres, de savans et d'artistes),*** **3 vols., Paris: Chez Panckoucke; Liège: Chez Plomteux, 1784, 1785, 1787.**

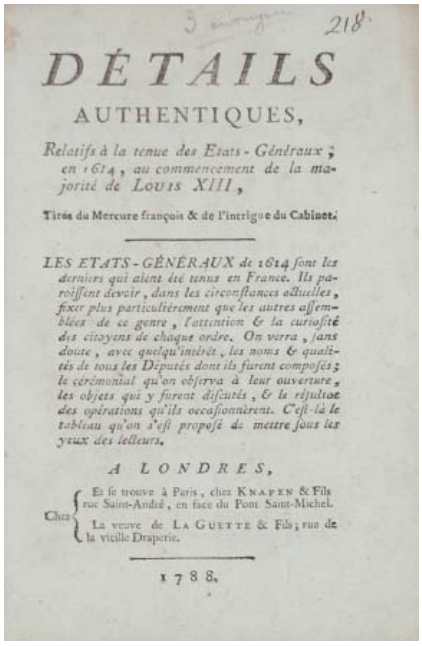
『財政学事典』(『体系百科全書』所収、パリ、リエージュ、1784、1785、1787)。『体系百科全書』は、ディドロ編纂の有名な『百科全書』を増補改訂して完全なものとする意図で企てられた。『百科全書』がアルファベット順に編集されているのに対し、こちらは学問分野別に編集されているのが特徴である。「体系」百科全書と名乗るゆえんである。刊行の中心となったのは、出版業者シャルル＝ジョゼフ・パンクーク(1736-1798)で、1782年に刊行が開始され、その後五〇年の歳月を費やして二〇八巻が出版されたが、未完に終わった。本学の二宮文庫には、このうち『法学事典』一〇巻、『財政学事典』三巻が収められている。

二宮は「「印紙税一揆」覚え書」――アンシアン・レジーム下の農民叛乱」において、『財政学事典』の諸項目を参照している。(SH)

26. Charles-Joseph Mayer, ***Des États généraux, et autres assemblées nationales,*** **tome 1-18, The Hague; Paris: Chez Buisson, 1788-1789.**

『全国三部会ならびに他の国民的会議体について』(ハーグ；パリ、1788-1789)。1788年8月、国王ルイ一六世は、翌年5月に全国三部会を召集することを約束した。財政難を解決するために、諸身分から協力をとりつけようとしてやむなく行ったものだった。しかし、全国三部会は1614年を最後に一五〇年以上ものあいだ開かれていなかったので、その代議員の構成方法・選出方法、開催後の討議形式をどのようにすべきかについて、議論が巻きおこった。そうした世論を背景として、過去に開催された全国三部会や名士会議について、資料を集め説明を加えているのが本書である。古書的価値もきわめて高い。シャルル＝ジョゼフ・マイエ(1751-1825?)著。(SH)


DES ÉTATS
GÉNÉRAUX,
ET
AUTRES ASSEMBLÉES
NATIONALES.
TOME PREMIER.
A LA HAYE,
& se trouve à PARIS
Chez BUISSON, Libraire, Hôtel de Coëtlosquet;
rue Hautefeuille, N°. 20.
1788.



DÉTAILS
AUTHENTIQUES,
Relatifs à la tenue des Etats-Généraux; en 1614, au commencement de la majorité de LOUIS XIII,
Tirés du Mercure françois & de l'intrigue du Cabinet.

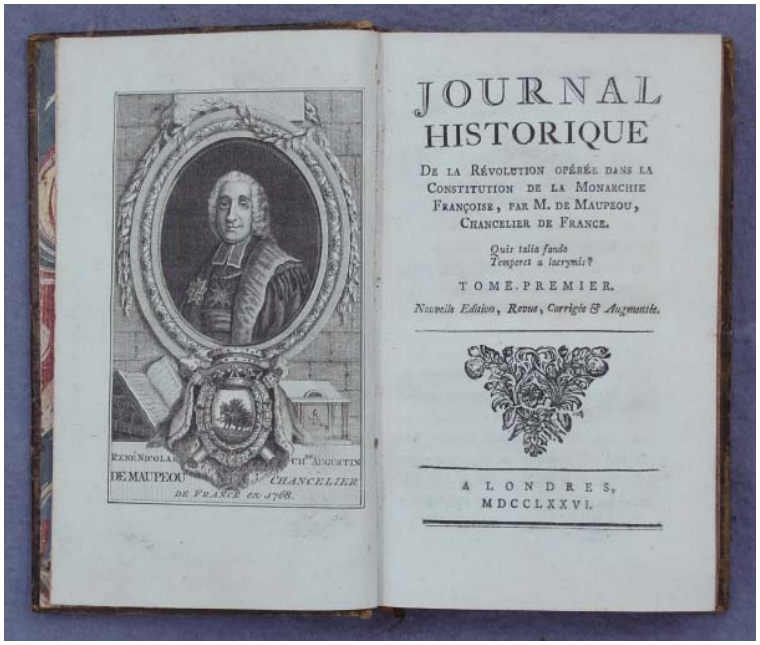
LES ETATS-GÉNÉRAUX de 1614 sont les derniers qui aient été tenus en France. Ils paroissent devoir, dans les circonstances actuelles, fixer plus particulièrement que les autres assemblées de ce genre, l'attention & la curiosité des citoyens de chaque ordre. On verra, sans doute, avec quelqu'intérêt, les noms & qualités de tous les Députés dont ils furent composés; le cérémonial qu'on observa à leur ouverture, les objets qui y furent discutés, & le résultat des opérations qu'ils occasionnèrent. C'est-là le tableau qu'on s'est proposé de mettre sous les yeux des lecteurs.

A LONDRES,
Chez { Et se trouve à Paris, chez KNAPEN & Fils rue Saint-André, en face du Pont Saint-Michel. / La veuve de LA GUETTE & Fils, rue de la vieille Draperie.

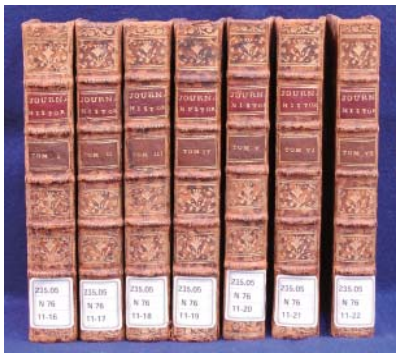
1788.

27. *Détails authentiques, relatifs à la tenue des Etats-Généraux; en 1614, au commencement de la majorité de Louis XIII,* London; Paris: Chez Knapen & fils, 1788.

『1614年の全国三部会開催に関する誤りのない詳細』(ロンドン;パリ、1788)。1788年8月に国王政府が翌年の全国三部会召集を約束すると、その開催形式がどのようなものであるべきかが問題となった。実際に1789年5月に開催されると、第三身分の代表たちが身分別投票ではないかたちでの投票を求めたのをきっかけとして、国民議会が成立することになることからも分かるように、これは重要な問題だった。それを検討する際に、人々は過去の三部会についての知識を得ようとしたが、とりわけ強い関心が集まったのは、もっとも近い1614年のそれであった。(SH)



JOURNAL
HISTORIQUE
DE LA RÉVOLUTION OPÉRÉE DANS LA CONSTITUTION DE LA MONARCHIE FRANÇOISE, PAR M. DE MAUPEOU, CHANCELIER DE FRANCE.
Quis talia fando Temperet a lacrymis?
TOME PREMIER.
Nouvelle Edition, Revue, Corrigée & Augmentée.
A LONDRES,
MDCCLXXVI.



28. Mathieu-François Pidansat de Mairobert et Barthélemy François Joseph Mouffle d'Angerville, *Journal historique de la révolution opérée dans la constitution de la monarchie françoise, par M. de Maupeou, chancelier de France*, 7 vols., London, 1776.

『大法官モプーによる改革についての編年史』(ロンドン、1776)。アンシアン・レジーム末期の一八世紀後半になると、高等法院が世論を背景に王権との対決の姿勢を強めるようになった。これに対して、大法官の職にあったモプーは高等法院の権限を大幅に縮小する改革――「モプー革命」と呼ばれたほど当時としてはラディカルなものだった――を行った。この改革についての賛否は別れ、高等法院は抵抗を続けた。改革に関わるそうした一連の出来事の説明と資料を年代順に編んだものが本書である。編者は、いずれも作家兼ジャーナリストのピダンザ・ド・メロベール(1727-1779)とムフル・ダンジェヴィル(1729?-1794?)で、モプーには批判的である。(SH)

書物の華麗なファサード・標題紙

本図録は、いわゆる標題紙（タイトル・ページ）を中心に紹介している。この標題紙がヨーロッパの書物に出現するのはいつのことだろうか。そう、ドイツの金細工師ヨハネス・グーテンベルクが活版印刷術を「発明」した頃、つまり、一五世紀半ば頃と考えられている。いや、より精確にいうなら、活版印刷術がヨーロッパに誕生した当初、最初のページは白紙のままであった。この白紙が時代の変遷とともに様々な文字情報で埋まり、標題紙に変貌していくのである。

まず書き込まれたのは、当然と言えばそれまでだが、書物の標題（タイトル）である。一行から二行ほどの短い標題がページの上部に登場した。次いでページの下部にイラストレーションが描き込まれるようになった。何のイラストレーションだろうか。そう、出版業者――多くは書籍商と印刷業者を兼ねた――の標章（マーク）である。これは、活版印刷術が誕生するまで手書きの書物つまり写本しか存在しなかった時代には、書物の最後に置かれていたものである。その後、標題のほうは、文字数がだんだん多くなっていき、最終的には一〇行程度にまで増殖、書物の内容紹介といった機能を担うようになった。この場合、標題部分の最初の文字が美しく飾り立てられることが多い。その他の情報として出版業者の住所も書き込まれるようになった。写本時代には、やはり最後に置かれていた情報である。活版印刷術による書物の場合は、最終的に標題紙の一番下に置かれるようになった。標題、標章、そして住所が、標題紙第一世代の基本的な三点セットをなすわけだ。

ところが一六世紀半ばになると、新しい情報が標題紙に登場する。著者名である。場合によっては、著者の肖像が標題紙裏面に登場することもある。そして、標題や著者名は、多種多様のフォント、スタイル、サイズの文字で書かれていく。しかも、一行にどれだけの文字数を含めるか、そして、どこで改行するかは変則的である。だから場合によっては、或る単語の真ん中で改行されてしまうこともあった。そこまでいくと、標題紙というパレットに自由な筆致で描かれた絵であるかのようだ。というのも実際に当時の標題紙は、どの情報が一番重要かといった観点から文字のサイズなどが決定されることは少なく、文字情報を幾何学状に配置するといった見栄えのほうが重視されていたからである。だから、標題紙を眺めているだけで飽きがこない。ところが、現代の書物であれば、一番目立つのは標題であり、次いで著者名であるはずだ。しかし、一六世紀の書物に現代の常識は通用しない。いずれにせよ、標題、著者名、そして出版業者、出版地と出版年、さらにイラストレーションや肖像によって標題紙の表裏が埋め尽くされるという事態は、一七世紀にも引き継がれる。しかも、活版印刷術の登場を大きな契機として木版を文字通り駆逐していった銅版は、この世紀にもなると、針で点描した箇所を塩酸や硝酸で腐食するエッチング技法などが発明されたおかげで、複雑な陰影を伴った精緻なイラストレーションや肖像で読者の目を楽しませていく。

さて、現代の常識がようやく通用するようになるのは、本図録でも多数掲載されている一八世紀の書物である。というのも、情報の重要度に応じて文字のサイズなどが理路整然と決定されていくからだ。つまり、標題がもっとも強調されるようになるのである。ところで、本図録にもそういった事例があるが、或る情報が標題紙から意図的に省かれることがある。それどころか、偽りの著者名、出版業者名、出版地と出版年が記載されることもある。なぜだろうか。端的にいうなら、検閲を掻い潜るためである。検閲という出版統制がフランスで王権のひとつとして敷かれるようになったのは、一六世紀のことである。その主要な目的は、宗教上の異端や危険思想を取り締まることであった。そのようななか、1566 年にムーラン王令が出されたことで、出版前の届出と出版允許（いんきょ）状の取得が義務付けられるようになる。この出版允許状のことをフランス語ではPrivilège du roi（王に由来する特権）といい、この言葉も標題紙に記載されるようになっていく。（YT）

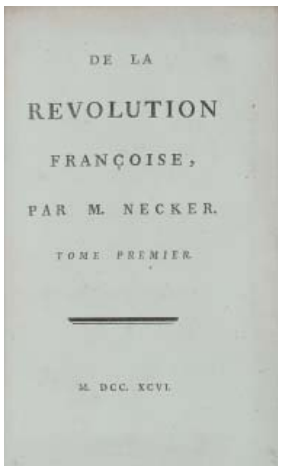
ALMANACH
ROYAL,
ANNÉE COMMUNE
M. DCC. LXXXIX.
PRÉSENTÉ
A SA MAJESTÉ
Pour la première fois en 1699.
PAR LAURENT D'HOURY, EDITEUR.

MIS EN ORDRE ET PUBLIÉ
PAR DEBURE, GENDRE DE FEU M. D'HOURY.
De l'Imprimerie de la Veuve D'HOURY & DEBURE, Imprimeurs-Libraires de Monseigneur le Duc d'ORLÉANS, rue Hautefeuille, près celle des Deux Portes.

AVEC APPROBATION ET PRIVILÈGE DU ROI.

29. *Almanach royal, année commune M. DCC. LXXXIX,* Paris: Chez la veuve d'Houry & Debure, 1789.

『王国年鑑――1789 年版』（パリ、1789）。『王国年鑑』には王家、親王家、高位聖職者、軍人、主要な役所を構成する人名などが掲載され、毎年発行された。職業上の必要からこうした人名についての情報を必要とする者は多かったので、少なからぬ発行部数を誇った。本書はフランス革命勃発の年に出版されたもの。この年鑑は、出版業者ローラン・ドゥリ（?-1725）によって 1683 年から発行され始めた。当初は別のタイトルがつけられていたが、ルイ一四世が 1699 年にこれを献上させ、1700 年から『王国年鑑』（アルマナ・ロワイヤル）の名称で発行されるようになった。（SH）



DE LA
REVOLUTION
FRANÇOISE,
PAR M. NECKER.
TOME PREMIER.
M. DCC. XCVI.

TABLE GÉNÉRALE.
TOME PREMIER.
Sect. I. Avant-courreurs & préparatifs des Etats-Généraux.
Ministère de M. l'Archevêque de Toulouse.
Second Ministère de M. Necker.
Assemblée des Notables.
Arrêtés du Conseil du 27 Décembre 1788.
Doublement du Tiers.
Chute du Parlement pour la tenue des Etats.
Sect. II. Assemblée des Etats. Réflexions générales.
Sect. III. Etats-Généraux jusques à la Séance Royale du 23 Juin 1789.
Sect. IV. Séance Royale du 23 Juin 1789.
Sect. V. Réunion des Ordres.
TOME SECOND.
Sect. I. Révolution du 14 Juillet 1789.
Sect. II. Assemblée Nationale, désignée sous le nom de Constituante.

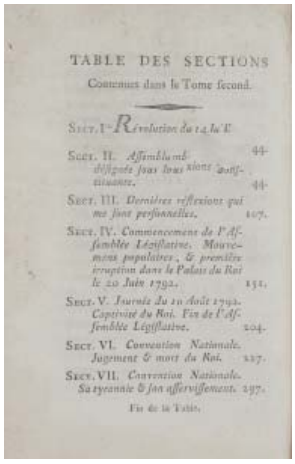
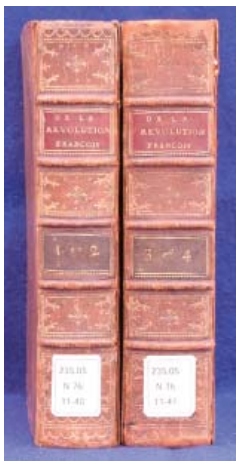


TABLE DES SECTIONS
Contenues dans le Tome second.
Sect. I. Révolution du 14 Juillet.
Sect. II. Assemblée nationale désignée sous le nom de Constituante. 44.
Sect. III. Dernières réflexions qui me sont personnelles. 107.
Sect. IV. Commencemens de l'Assemblée Législative. Mouvemens populaires, & première irruption dans le Palais du Roi le 20 Juin 1792. 151.
Sect. V. Journée du 10 Août 1792. Captivité du Roi. Fin de l'Assemblée Législative. 204.
Sect. VI. Convention Nationale. Jugement & mort du Roi. 227.
Sect. VII. Convention Nationale. Sa tyrannie & son asservissement. 257.
Fin de la Table.



30. Jacques Necker, *De la Revolution françoise,* 2 vols., 1796.

ジュネーブの生まれ、パリで活躍した銀行家、政治家のネッケル（1732-1804）は、フランス革命前夜、財務長官として国家の財政赤字を埋めるべく、課税方式の改革などに取り組む。しかし、免税特権階級の強い反対に遭う。さらにマリー・アントワネット一派の圧力を受け、1789 年 7 月 11 日に解職。三日後のパリ民衆によるバスティーユ襲撃の一因であった。その後、復職するも翌年には辞職、帰郷し、スタール夫人の名でフランス文学史に輝く娘との生活の合間に、自身の財政改革の弁明とフランス革命の批判を主眼とする書物を執筆。そのひとつが大著『フランス革命論』（出版地不詳、1796）である。第二巻第四部は、1793 年に執筆された「平等に関する哲学的考察」を収録。フランス人権宣言に謳（うた）われた平等主義が批判されている。（YT）

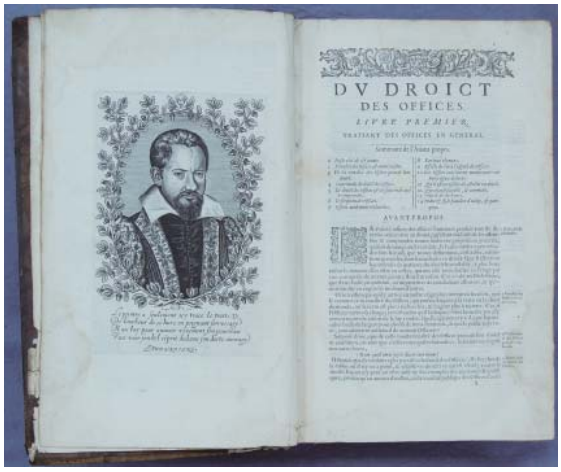
第二章　「フランス絶対王政の統治構造」
——生活世界から権力秩序へ

二宮は歴史学という学問を、どのように考えていたろうか。高校生・大学新入生向けに何人もの歴史研究者が歴史学の紹介をする企画で、二宮は次のように回答していた。「歴史を研究するとは、すでに骨組みができあがっている家に小さな石を一つ嵌め込むといった作業ではなく、自分で新しい家を造ることなのだということを、まずしっかりと頭に入れておきたい。これは、それくらいの覇気を持とうなどと言っているのではなく、歴史研究とは、好むと好まざるとにかかわりなく、そういうものでしかありえないということを、はっきりと自覚しておこうということである。新しい家を造るためには、それに必要なあらゆる技を身につけなくてはならない。痕跡を見つけ出すあくなき執念（この情熱がなければ歴史はやめた方がよい）、痕跡を読み解く技法……、そして大きく構築する力（すぐれた作品に親しむこと——これは構想力の大切さを学ぶのであって真似をするためではない）」（初出は『AERA Mook 10 歴史学がわかる。』朝日新聞社、1995；のち『二宮宏之著作集』第一巻、岩波書店、2011に収録）。

二宮の代表的論文「フランス絶対王政の統治構造」（初出は吉岡昭彦・成瀬治編『近代国家形成の諸問題』木鐸社、1979）は、その「大きく構築する力」「構想力」が遺憾なく発揮された作品である。二宮は、絶対王政の統治構造を制度や政治、あるいは階級からではなく、社会的結合関係（ソシアビリテ）を基礎に置いて考える。社会的結合関係とは人と人の絆（ただし絆は、しがらみにもなり得る）であり、この論文では農民共同体・手工業者の団体・商人の団体・役人の団体などの機能的職能的結合と家・街区・地域などの空間的地縁的結合として現れる。このように社会的結合関係という視座を導入して権力構造を分析することができたのは、「印紙税一揆」の研究を通じて人々の生活や意識を重視する眼を獲得していたからである。

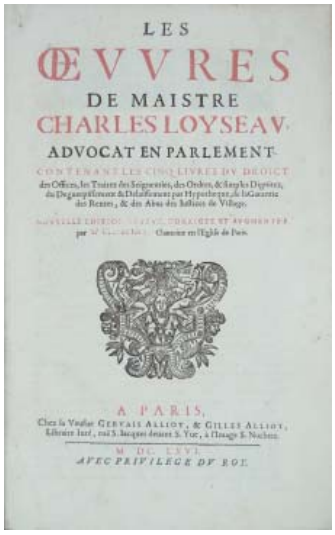
こうした視角は、たんにフランス絶対王政の問題にとどまらず歴史分析に新たな可能性をもたらすものであったから、社会史的研究を目指す者にとどまらず、多くの歴史家の注目するところとなり、必読文献となった。（SH）

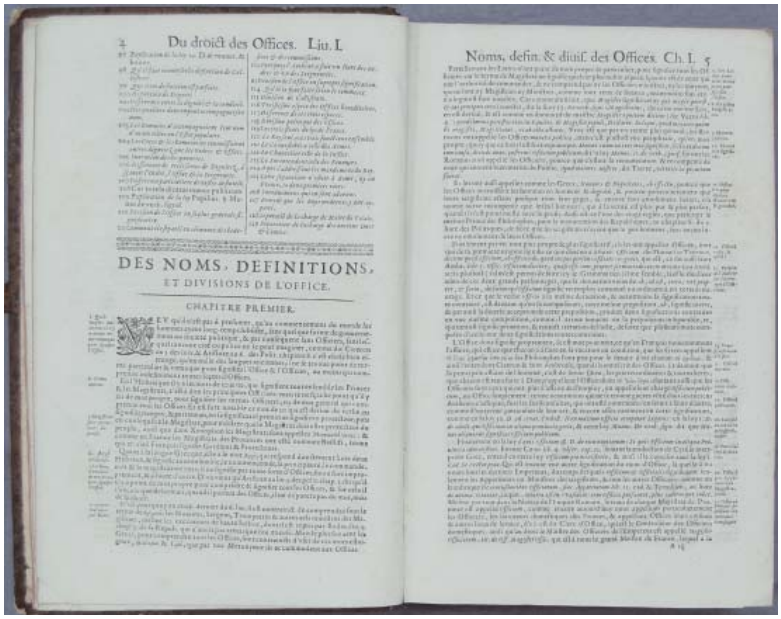
留学時代の二宮宏之氏（書斎にて）



31. Charles Loyseav, *Cinq livres dv droict des offices, avec le livre des seignevries, et celvy des ordres,* Paris: Chez la Veuve Abel l'Angelier, 1613.

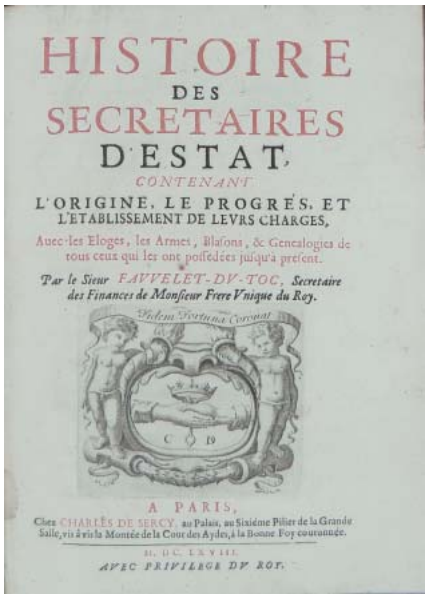
『官職論ならびに権力論、身分論』（パリ、1613）。著者のシャルル・ロワゾー（1564-1627）は、一七世紀フランスを代表する法学者であり、法の実務家。サンス上座裁判所判事、ロングヴィル公妃所領の代官、パリの弁護士組合長を務めた。彼の著作は広く読まれ、生前に二つの版、歿後に五つの版の著作集が刊行された。本書は、生前の二つの版のひとつ。「官職論」（1610）、「権力論」（1608）、「身分論」（1610）などを収める。（SH）





32. Clavde Ioly, *Les œvvres de maistre Charles Loyseav, advocat en parlement,* Paris: Chez la Veuve de Gervais Alliot & Gilles Alliot, 1666.

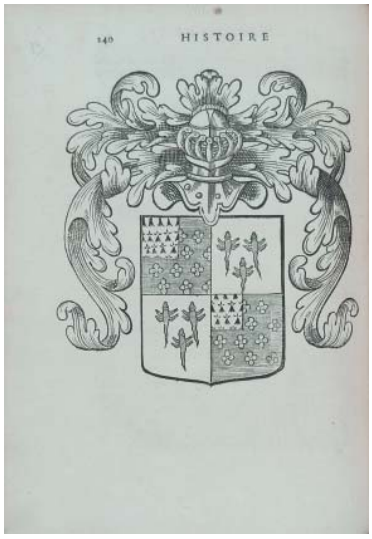
『高等法院弁護士シャルル・ロワゾー著作集』（パリ、1666）。ロワゾー（1564-1627）の歿後にクロード・ジョリ（1607-1700）の編集により刊行された著作集のうちのひとつ。ロワゾーが著作を発表したのは、フランスで長く続いた宗教戦争がようやく終息した時期だった。国王の主権を強調する彼の議論は、アンリ四世の下で秩序の再建につとめるフランス王権に正統性の根拠を与えるものだった。また、1960 年代にパリ大学教授ロラン・ムーニエ（1907-1993）が、一七世紀のフランス社会を身分制社会と捉え、階級社会説を唱えるマルクス主義史家を批判したさいに、その主張の裏づけとしたのが、ロワゾーの「身分論」であった。（SH）

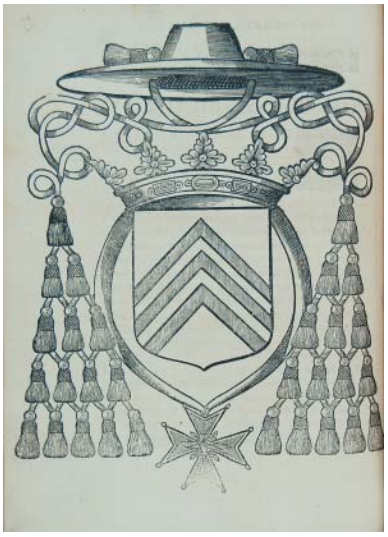

HISTOIRE
DES
SECRETAIRES
D'ESTAT,
CONTENANT
L'ORIGINE, LE PROGRÉS, ET
L'ETABLISSEMENT DE LEVRS CHARGES,
Auec les Eloges, les Armes, Blasons, & Genealogies de tous ceux qui les ont possedées jusqu'à present.
Par le Sieur FAVVELET-DV-TOC, Secretaire des Finances de Monsieur Frere Vnique du Roy.
Videm Fortuna Coronat
A PARIS,
Chez CHARLES DE SERCY, au Palais, au Sixiéme Pilier de la Grande Salle, vis à vis la Montée de la Cour des Aydes, à la Bonne Foy couronnée.
M. DC. LXVIII.
AVEC PRIVILEGE DV ROY.

33. Antoine Favvelet-dv-Toc, *Histoire des secretaires d'estat, contenant l'origine, le progrès, et l'etablissement de levrs charges,* Paris: Chez Charles de Sercy, 1668.

アントワーヌ・フォーヴレ・ドゥ・ト（生歿年不詳）による『国務卿職の歴史――その起源・発展・確立』（パリ、1668）。国務卿職は、宮内卿、外務卿、陸軍卿、海事卿の四人の行政執行部門の長より成り、大法官、財務総監の職とならぶ重職である。本書はそうした国務卿職とそれを担った人物の家系を顕彰する意味をもったと考えられる。それぞれの家系の紋章も添えられている。

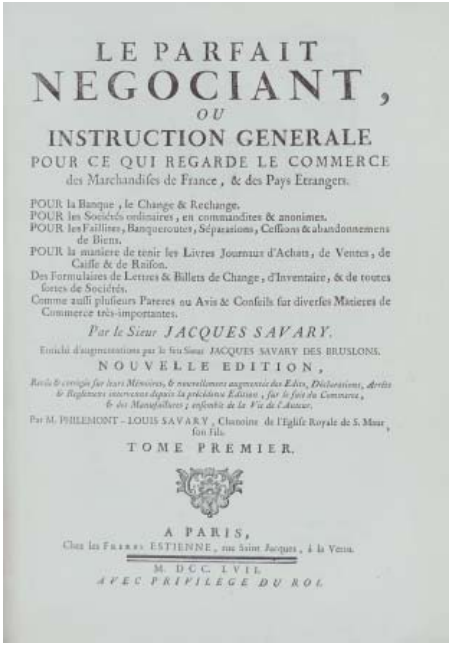
二宮はフランスのアナール派に学んだが、二宮自身の研究はフランスの社会史とは異なり、国制史研究すなわち権力秩序の問題も視野に入れた社会史研究だった。史料的価値も高いこの貴重な蔵書は、二宮の国制史についての造詣の深さを窺わせる。（SH）





紋章の謎解き

ヨーロッパの紋章は、情報の宝庫である。基本的には日本の家紋と同様に、或る個人がどの家系に属しているかを示すものだが、紋章の中央部に陣取る「盾」を中心に、アクセサリーのような多種多様の図案が色彩豊かに散りばめられているため、各構成要素が何を意味しているのかを読み解くには、専門的な知見つまり紋章学の知識が必要とされる。紋章の基本的な構成要素とその配置は次の通り。「盾」の上部に「兜」と「兜飾り」、さらに「マント」や「リース」が置かれ、「盾」の左右を想像上の動物などの「盾持ち」が支える。座右の銘や家訓に相当する「モットー」がラテン語などで最上部か最下部に書き込まれることもある。また、紋章の所有者が爵位保持者である場合、爵位を示す「小冠」が置かれる。具体的には、中央図の紋章に描かれている「小冠」が公爵で、右図が伯爵である。左図には「小冠」がなく「兜」だけなので、爵位を持たない者の紋章であろう。なお、「盾」は男子とりわけ戦役に就く男子に用いられ、聖職者や女子には、盾型ではなく菱形の形状が用いられる。（YT）



LE PARFAIT
NEGOCIANT,
OU
INSTRUCTION GENERALE
POUR CE QUI REGARDE LE COMMERCE
des Marchandises de France, & des Pays Etrangers.

POUR la Banque, le Change & Rechange.
POUR les Sociétés ordinaires, en commandites & anonimes.
POUR les Faillites, Banqueroutes, Séparations, Cessions & abandonnemens de Biens.
POUR la maniere de tenir les Livres Journaux d'Achats, de Ventes, de Caisse & de Raison.
Des Formulaires de Lettres & Billets de Change, d'Inventaire, & de toutes sortes de Sociétés.
Comme aussi plusieurs Pareres ou Avis & Conseils sur diverses Matieres de Commerce très-importantes.

Par le Sieur JACQUES SAVARY.

Enrichi d'augmentations par le feu Sieur JACQUES SAVARY DES BRUSLONS.

NOUVELLE EDITION,

Revûe & corrigée sur leurs Mémoires, & nouvellement augmentée des Edits, Déclarations, Arrêts & Reglemens intervenus depuis la précédente Edition, sur le fait du Commerce, & des Manufactures; enfemble de la Vie de l'Auteur.

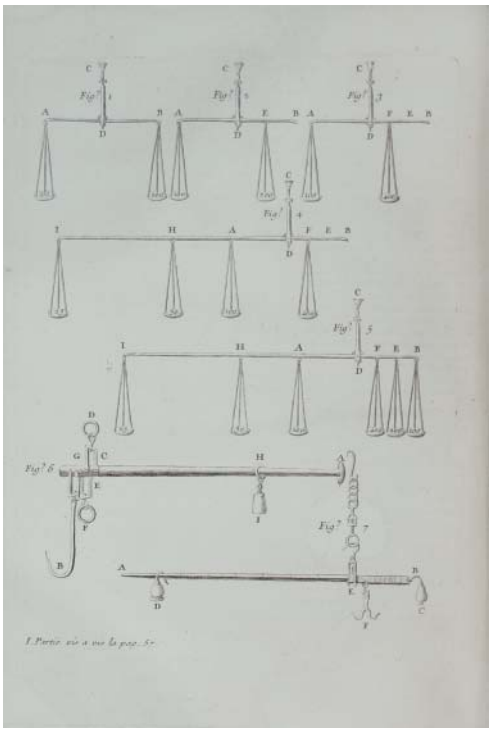
Par M. PHILEMONT-LOUIS SAVARY, Chanoine de l'Eglise Royale de S. Maur, son Fils.

TOME PREMIER.

A PARIS,
Chez les FRERES ESTIENNE, rue Saint Jacques, à la Vertu.

M. DCC. LVII.
AVEC PRIVILEGE DU ROI.

34. Jacques Savary, *Le parfait negociant*, Paris: Chez les Freres Estienne, t. I, 1757; t. II, 1753.



『完全な商人』は、著者サヴァリ（1622-1690）によるサヴァリ法典の解説書である。著者は、1673 年制定の「商人の商業のための規則として役立つフランスおよびナヴァルの王ルイ一四世の王令」の起草者でもあったため、この王令はサヴァリ法典と通称される。財務総監コルベール（1619-1683）の命によるこの法典は、商業帳簿および財産目録に関する規定を含んでいることから、会計史上、劃期的（かっきてき）意義を有する。つまり、すべての商人に決算書の作成を義務付けたのだ。その必要性と重要性を自覚していたサヴァリは本書のなかで、「商品の売上・仕入」「現金の受取・支払」「約束手形の振出・引受」「為替手形の引受・受取」「財産の譲渡」そして「全ての取引」を記帳することの徹底を求めている。法典解説のみならず、商業実務の解説も含む本書は好評を博し、出版後は増刷されただけでなく、各国語に翻訳された。二宮が所蔵していたのは、1675 年刊行の初版ではなく、一八世紀半ばのパリでの再刊本。（YT）

本の判型あれこれ

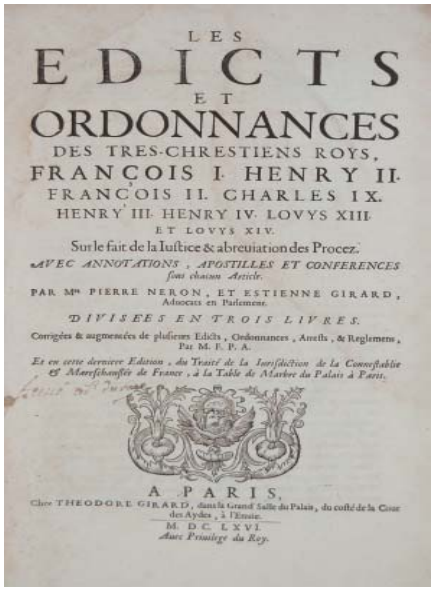
ヨーロッパの基本的な造本は、全紙を何回か折りたたむことでできる折丁を何冊か重ねて綴じるものだ。だから本の大きさ、つまり判型（format）は、全紙の大きさと、それを折りたたんだ回数で決まってくる。全紙を一回折りたたんだものをフォリオ (folio) 、二回折りをクォート (quarto) 、三回折りをオクターヴォ (octavo) 、四回折りをセクスト・デチモ (sexto-decimo) と呼び、それぞれ 2°、4°、8°、16° と略記する。フォリオ版は縦約 30 センチから約 50 センチ（全紙の大きさで変わる）、クォート版は縦約 22 センチから約 37 センチ、オクターヴォ版は縦約 16 センチから約 25 センチ、そしてセクスト・デチモ版は縦約 11 センチから約 19 センチである。（YT）

第三章　「王の儀礼」――権威と権力、そして「読解の歴史学」

二宮は、1989年から1991年にかけて岩波書店より刊行された『シリーズ世界史への問い』（全一〇巻）の編集委員を務めたが、第七巻『権威と権力』に自ら執筆したのが、「王の儀礼」である。この論文は「フランス絶対王政の統治構造」の続編という性格をもっていた。「統治構造」では、王権は絶対的な権力をふるうことができていたわけではなく、社会的結合関係によって形成されたさまざまな団体の固有の権利を尊重し、それを支配秩序のうちに位置づけようとしていたことを示した。だが、それらの団体を把握していく具体的な方法については、明らかにするに至らなかった、と二宮は考えていた。その課題に回答を与えようとしたのが、「王の儀礼」である。

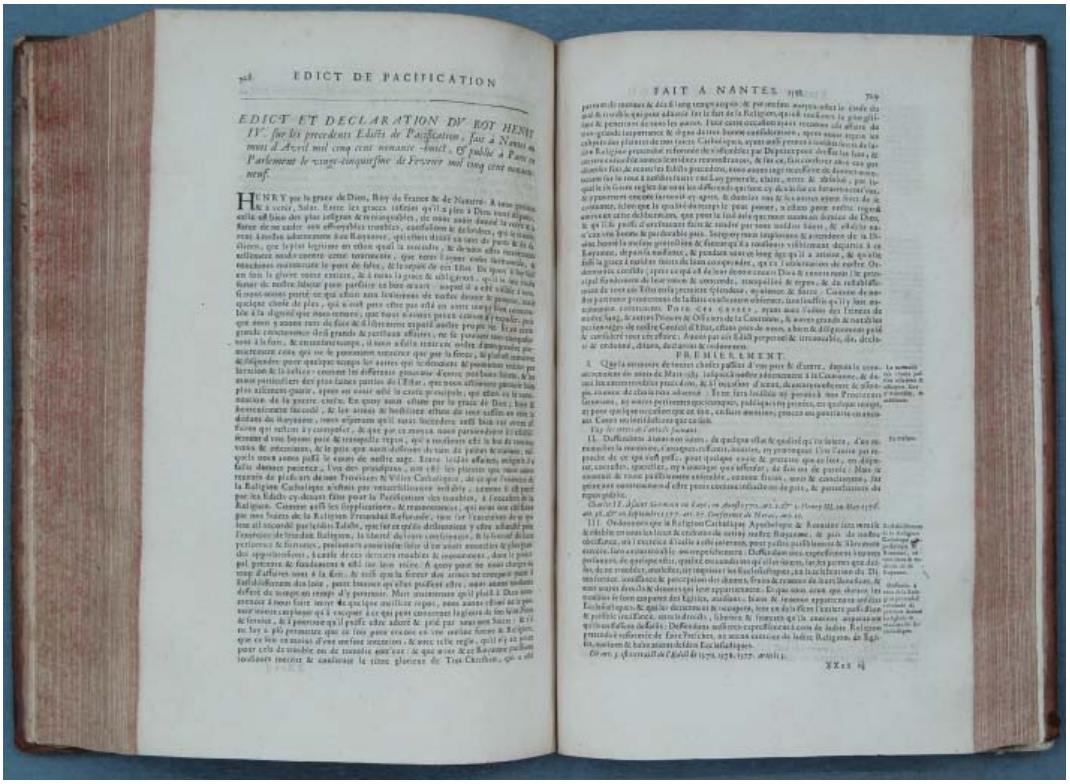
中世から近世にかけてフランスの王権は、さまざまな儀礼を行っていた。即位時の成聖式、王の葬儀、国王が自ら高等法院に臨席して行う「親裁座」、国内を宮廷ごと移動して旅した巡幸、自律的な権限をもった存在である都市へ国王が入るさいに都市側と協力して行った入市式、などである。こうした儀礼を通じて人々に浸透した国王の「権威」こそが、物理的な「権力」の行使を可能にした。

要約的に言えばこれが回答だが、この論文では、それ以上のことが論じられている。1980年代の後半から、二宮は「読解の歴史学」に言及することが多くなる。「読解の歴史学」とは、二宮が「系の歴史学」（物価史などで行われた同質的なデータの統計的な分析に基づく研究）と対比させて名付けたものである。たとえば、或る書物を読者がどのように読んだか、読者が書物を読んで想い描いたこうした象徴的世界を、歴史家はどのように読み解けばよいのか、それを問題にする歴史研究ということである。儀礼について言えば、それに参加した者や見た者が王についてどのように想い描いたか、が問われる。二宮は、儀礼を通じての国王権威の伝達が広範囲に広がれば広がるほど、人々がそこに見出す意味は絶対王権の公認理論とのズレを大きくする、と読むのである。（SH）


LES
EDICTS
ET
ORDONNANCES
DES TRES-CHRESTIENS ROYS,
FRANÇOIS I. HENRY II.
FRANÇOIS II. CHARLES IX.
HENRY III. HENRY IV. LOVYS XIII.
ET LOVYS XIV.
Sur le fait de la Iustice & abreuiation des Procez.
AVEC ANNOTATIONS, APOSTILLES ET CONFERENCES
sous chacun Article.
PAR Mrs PIERRE NERON, ET ESTIENNE GIRARD,
Advocats en Parlement.
DIVISEES EN TROIS LIVRES.
Corrigées & augmentées de plusieurs Edicts, Ordonnances, Arrests, & Reglemens,
Par M. I. P. A.
Et en cette derniere Edition, du Traité de la Iurisdiction de la Connestablie
& Mareschaussée de France, à la Table de Marbre du Palais à Paris.
A PARIS,
Chez THEODORE GIRARD, dans la Grand'Salle du Palais, du costé de la Cour
des Aydes, à l'Ensuie.
M. DC. LXVI.
Auec Priuilege du Roy.

35. Pierre Neron et Estienne Girard, *Les edicts et ordonnances des tres-chrestiens roys, François I. Henry II. François II. Charles IX. Henry III. Henry IV. Lovys XIII. et Lovys XIV*, Paris: Chez Theodore Girard, 1666.

『いともキリスト教的なる国王フランソワ一世、アンリ二世……の王令集』（パリ、1666）。中世のヨーロッパでは、人々は国家が定めた同一の法の下に暮らしていたわけではなかった。地域的な慣習法、都市法また職業団体の法が大きな役割を果たしていた。ところが絶対王政期に入ると、王権の伸長にともなって、国王のつくる法すなわち王令が重要性を増してくる。本書は、代表的な王令集のひとつで、ルイ一四世親政初期の時代までの王令を収録する。宗教戦争に終止符を打ったことで有名なナントの王令（次頁参照）なども収録されている。編者のピエール・ネロン（生歿年不詳）、エチエンヌ・ジラール（生歿年不詳）はともにパリ高等法院弁護士を務めた。（SH）

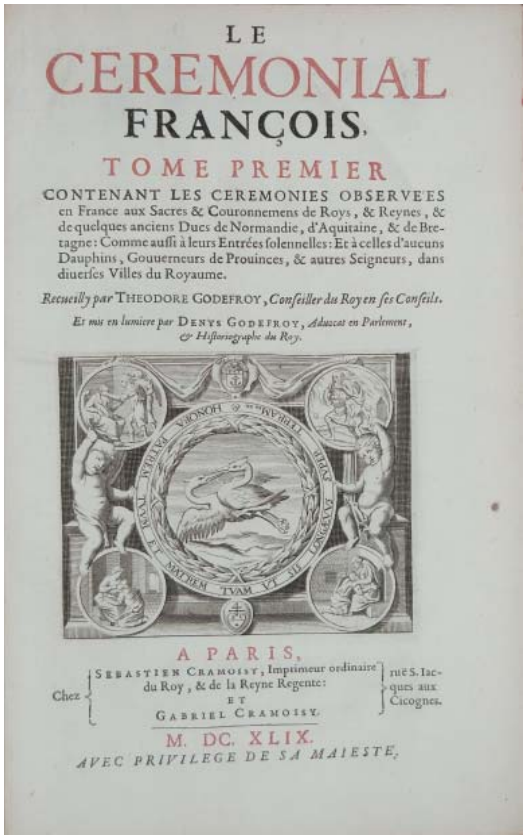

EDICT DE PACIFICATION

EDICT ET DECLARATION DV ROY HENRY IV. sur les precedents Edicts de Pacification, fait à Nantes au mois d'Avril mil cinq cent nonante-huict, & publié à Paris en Parlement le vingt-cinquiesme de Feurier mil cinq cent nonante-neuf.

FAIT A NANTES.

PREMIEREMENT.

「ナントの王令」が掲載されている箇所


LE
CEREMONIAL
FRANÇOIS.
TOME PREMIER
CONTENANT LES CEREMONIES OBSERVEES en France aux Sacres & Couronnemens de Roys, & Reynes, & de quelques anciens Ducs de Normandie, d'Aquitaine, & de Bretagne: Comme aussi à leurs Entrées solennelles: Et à celles d'aucuns Dauphins, Gouuerneurs de Prouinces, & autres Seigneurs, dans diuerses Villes du Royaume.
Recueilly par THEODORE GODEFROY, Conseiller du Roy en ses Conseils.
Et mis en lumiere par DENYS GODEFROY, Aduocat en Parlement, & Historiographe du Roy.
A PARIS,
Chez SEBASTIEN CRAMOISY, Imprimeur ordinaire du Roy, & de la Reyne Regente: ET GABRIEL CRAMOISY. rue S. Iacques aux Cicognes.
M. DC. XLIX.
AVEC PRIVILEGE DE SA MAIESTE.

36. Theodore Godefroy et Denys Godefroy, *Le ceremonial françois*, 2 vols., Paris: Chez Sebastien & Gabriel Cramoisy, 1649.

『フランス儀典書』（パリ、1649）。一六世紀半ば以降、王権の伸長とともに宮廷がその存在を大きくすると、儀礼についての関心が高まり、複数の儀典書が編まれることになった。本書はその代表的なもので、いずれも法学者で王室修史官であるテオドール（1580-1649）及びドニ・ゴドフロワ（1615-1681）父子の手になる。1619年にテオドールが本書の原型となる儀典書を刊行していて、本書はドニが新たな史料を加えて刊行したもの。成聖式、入市式、婚礼、出生祝賀、三部会、名士会、親裁座、修道行列、テ・デウムが扱われている。二宮が論文「王の儀礼――フランス絶対王政」（岩波書店刊『二宮宏之著作集』第三巻（2011）所収）の史料として使用した。（SH）

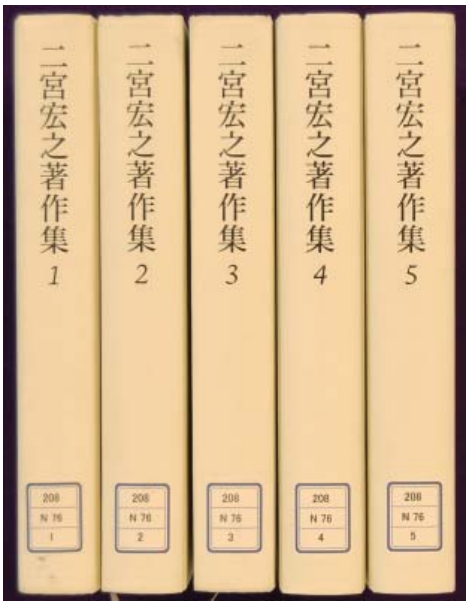
この時代にナントの王令を改めて読む

マルティン・ルターが『贖宥状の意義と効果に関する見解』つまり通称『九五ヵ条の論題』をヴィッテンベルク大学の聖堂の扉に貼ったとされるのは、1517 年のことである。当時のカトリック教会による贖宥状（免罪符）の販売を告発するこの文書は、ドイツにおける宗教改革運動の契機になったと言われる。その後、宗教改革の波はヨーロッパの各地に広がり、来年はその五〇〇周年に当たる。それはまた、宗教改革に端を発し、酸鼻をきわめた一連の宗教戦乱のことを私たちに改めて想起させる。なぜ同じ神に対する信仰が、ヨーロッパの各地に無際限な簒奪と殺戮を引き起こすことになったのか。とりわけ一六世紀のフランスを理解するうえで、キリスト教の存立基盤を襲ったこの危機を無視することはできない。となれば、この危機を乗り越えようとしたフランス国王・アンリ四世（1553-1610）の企図を軽視することもできないはずだ。

その企図の核心をなすのは、他でもない、新教徒つまりプロテスタントの信仰と生活の自由を認めたナントの王令（1598）である。その第六条を二宮の翻訳で見てみよう。曰く、「余が臣民の間に、騒乱、紛議のいかなる動機も許さぬため、余は改革派信徒が、余に服する王国のすべての場所において、なんら審問、誅求、迫害されることなく生活し居住することを認める。かれらは事宗教に関して、その信仰に反するおこないを強いられることなく、またこの勅令に従う限り、かれらの住まわんと欲する住居･居住地内において、その信仰の故に追及されることもない」（初出は「異端紛争」『図説 世界文化史大系 8 ルネッサンス』角川書店、1959；のち『二宮宏之著作集』第四巻、岩波書店、2011 に収録）。二宮はこの王令について次のように評している。これは「新教徒の信仰と生活の自由を定めているが、よく見れば旧教徒に有利なものとなっている。しかし長年の内乱の末、なおカトリック勢力が圧倒的な勢いをもっているフランスの政情を考えるとき、ここに信教の自由への第一歩があったことを認めぬわけにゆかない」、と。

「アンリ四世像」、ピエール・ランドリー作、1662 年、フランス国立図書館（BnF）蔵

人類はその後、この「第一歩」をどのように押し進めて、二一世紀に辿り着いたのだろうか。神の名を口にしながら一般市民を無差別に巻き込むテロリズムに怯える現代の私たちに、一六世紀のフランスの人々は何を教えてくれるだろうか。当時の宗教戦乱を文字通り生き抜いた思想家モンテーニュは、その『エセー』第一巻二六章「子供の教育について」において、歴史教育が目指すべきは、瑣末な歴史的事象の記憶ではなく、カエサルやリウィウスといった歴史家の伝える過去の偉大な人物の行為について、自分であればどのように判断するだろうと考えながら、自身の判断力を矯正し、また育成していくことだ、と述べている。現代の私たちが一六世紀のフランスから学ぶべきことは決して少なくない、と思われるゆえんである。（YT）



37. 二宮宏之、『二宮宏之著作集』全五巻、岩波書店、2011.

二宮の歿後、生前に深い学問的交流をもった歴史家たち、福井憲彦、林田伸一、工藤光一が編集委員となって出版された。フランス語による論攷の邦訳、単行本未収録の論攷、小論や書評など、二宮が書いた様々な文章が集成され、かつ、主題別に編成されている。「社会史」「身体性と心性」「ソシアビリテ（社会的結合）」「歴史認識」など、現代歴史学を理解するうえで欠かすことのできない方法論と概念についても、玲瓏（れいろう）な筆致で味わい深い考察が展開されている。（YT）

留学時代の二宮宏之氏（パリ市内にて）

CÉRÉMONIAL
DU SACRE
DES ROIS DE FRANCE,
Précédé d'une Dissertation sur l'ancienneté de cet acte de Religion ; les motifs de son institution, du grand appareil avec lequel il est célébré, & suivi d'une Table Chronologique du Sacre des Rois de la seconde & troisieme Race.
On y a ajouté la traduction de toutes les Oraisons & Prieres qui sont une grande partie de la Cérémonie, & on a donné une idée du Sacre & Couronnement des Reines de France.
A PARIS,
Chez G. DESPREZ, Imprimeur ordinaire du Roi & du Clergé de France, rue St. Jacques.
M DCC. LXXV.
Avec Approbation & Privilege du Roi.

38. Pons-Augustin Alletz, *Cérémonial du sacre des rois de France,* Paris: Chez G. Desprez, 1775.

『フランス国王成聖式の手引き』（パリ、1775）。国王が歿して新しい国王が即位すると、新国王はランス大聖堂で大司教による塗油を中心とする成聖式と呼ばれる一連の儀式を執り行うのが、フランスの伝統であり、これによって国王は聖性を身に帯びるとされた。

ルイ一五世が 1774 年 5 月に歿すると、挙行される予定の新国王ルイ一六世の成聖式に対する一般の関心が高まった。そうした関心に応えて売り出されたのが、本書である。重厚なゴドフロワの儀典書とは異なり携帯サイズで、序文には「観衆として成聖式に立ち会う人々にとって便利で有益でありましょう」とある。ポンス＝オーギュスタン・アレツ（1703-1785）著。（SH）

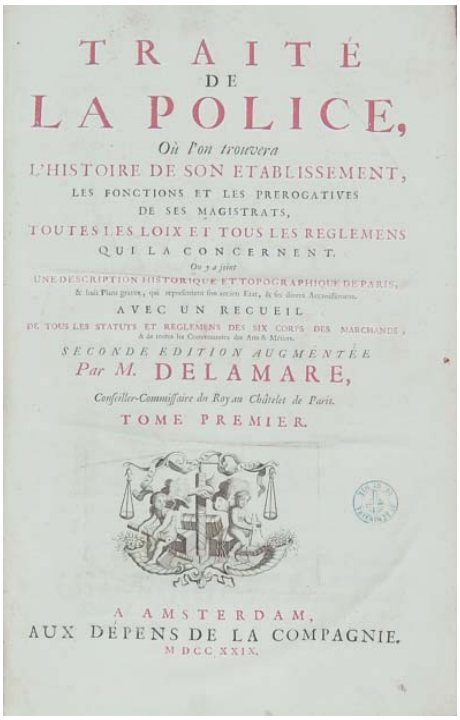
第四章　歴史における日常性と権力
——ニコラ・ドラマールとその周辺

二宮の深い学殖が、具体的な論文として発表されなかったものも少なくない。そのひとつが、ニコラ・ドラマールに関わるものであろう。ドラマールは、パリのシャトレ裁判所警視である。首都の治安維持は王権にとって大きな関心事であった。そこで、財務総監コルベールの時代の1667年に、形式上はシャトレ裁判所に属しながらも実質的には国王に直属する「パリ警視総監」職を設けて、この任に当たらせた。ドラマールは、初代のパリ警視総監となったラ・レニー（在任1667-1697）の部下として働いた人物である。シャトレ裁判所警視はドラマールを含めて四八人いて、パリのそれぞれの地区を分担したが、ドラマールはそのほかに出版物取締りの分野も担当していた。ドラマールは自らの仕事である秩序維持に関する中世以来の膨大な資料を集めていて、その一部を『ポリス提要』（四巻、未完）として刊行したのである。未刊行の資料は、フランス国立図書館に「ドラマール文書」として収蔵されている（ドラマール文書については、二宮素子「ルイ十四世治下の出版統制——治世後半のパリを中心に」『史学雑誌』第七九編七号、1970;同「十八世紀初頭パリにおける押収文書——ドラマール文書分析の試み」『共立女子短期大学文科紀要』第二三号、1979）。

二宮がドラマールに関心を抱いていたのは、二宮のフランス絶対王政についての捉え方に係わっている。第二章や第三章で触れたように、国王政府の物理的権力は限られていて、社会の人的結合関係によって形成されたさまざまな団体が大きな役割を果たしているとすれば、王国内約二二〇〇万人の人々を、とりわけ流入人口の増大によって約五〇万人を越える大規模な人口を抱えるパリを（いずれも、一八世紀初頭）どのように統治していたのだろうか。それは、そうした社会的結合関係に外部から介入し、日常生活にまで規制の網をかけることによってであり、それがドラマールらに課された役目だった、と考えるのである。

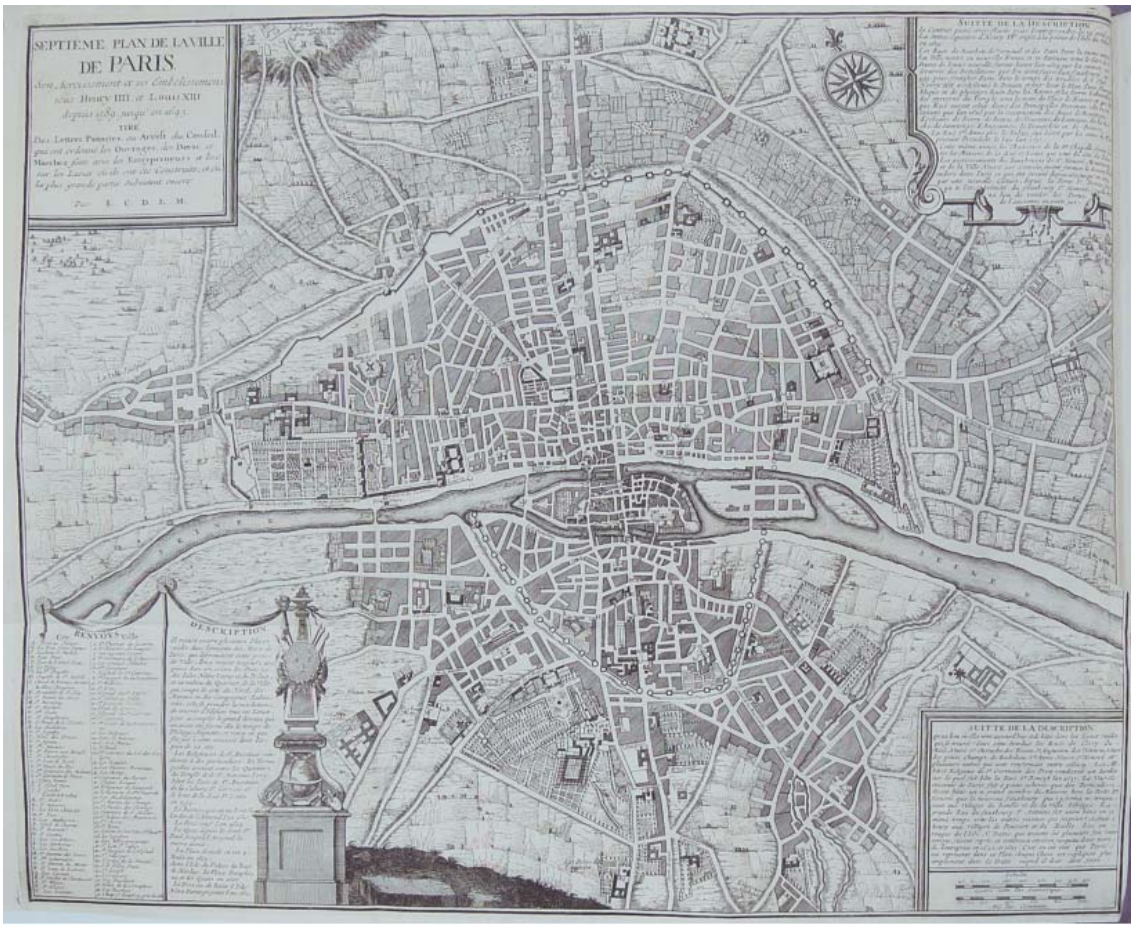
なお、二宮はドラマールについての論文を書くには至らなかったが、1984年の東京大学文学部において、『ポリス提要』を詳細に読み解く講義を行っている。（SH）

留学時代の二宮宏之氏（書斎にて）


TRAITÉ
DE
LA POLICE,
Où l'on trouvera
L'HISTOIRE DE SON ETABLISSEMENT,
LES FONCTIONS ET LES PREROGATIVES
DE SES MAGISTRATS,
TOUTES LES LOIX ET TOUS LES REGLEMENS
QUI LA CONCERNENT.
On y a joint
UNE DESCRIPTION HISTORIQUE ET TOPOGRAPHIQUE DE PARIS,
& huit Plans gravés, qui représentent son ancien Etat, & les divers Accroissemens.
AVEC UN RECUEIL
DE TOUS LES STATUTS ET REGLEMENS DES SIX CORPS DES MARCHANDS,
& de toutes les Communautés des Arts & Métiers.
SECONDE EDITION AUGMENTÉE
Par M. DELAMARE,
Conseiller-Commissaire du Roy au Châtelet de Paris.
TOME PREMIER.
A AMSTERDAM,
AUX DÉPENS DE LA COMPAGNIE.
M DCC XXIX.

39. Nicolas de La Mare, *Traité de la police*, t. I et II, Amsterdam: Aux dépens de la Compagnie, 1729; *Continuation du Traité de la police*, Paris: Jean-François Hérissant, 1738.

『ポリス提要』（第一、二巻は 1729 年出版のアムステルダム版、「続編」は 1738 年の版）。コルベールの特命をうけたパリのシャトレ裁判所警視、ニコラ・ドラマール（1639-1723）が、パリ高等法院の文書を用いて大都市の秩序維持に必要な古今の法や規則を四〇年近くの歳月をかけてまとめ、解説した。はじめて近代ポリスの礎石を築いた大著。この時期のポリスとは、現在の警察という意味より広く、都市の秩序を維持するための行政全般をさす。第一巻と二巻は 1705 年から 1719 年に初刷が出版された。二宮が所蔵していたのは、1729 年に増補されたアムステルダム版。道路行政を扱う「続編」は、ドラマールの歿後に協力者ル・クレ・ド・ブリレによって出版された。通常併せて四分冊だが、二宮旧蔵のものは三分冊である。「権力の社会史」を志向した二宮は、ドラマール文書に関する論文を書く構想を最晩年まで持ち続けていた。特別出展（二宮宏之蔵、筑波大学附属図書館寄贈予定）。（NT）



『ポリス提要』に掲載の一六世紀末から一七世紀初頭にかけてのパリの地図

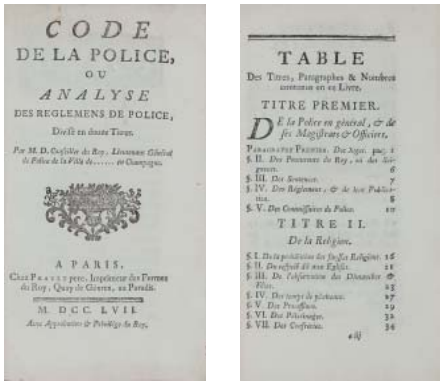
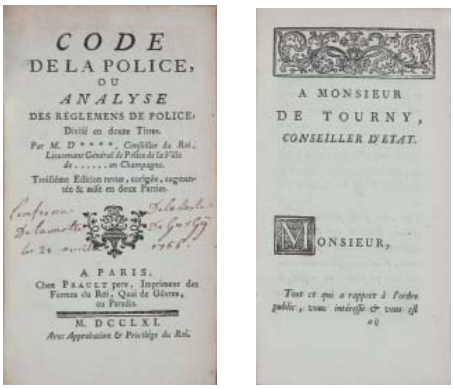

CODE
DE LA POLICE,
OU
ANALYSE
DES REGLEMENS DE POLICE,
Divisé en douze Titres.
A PARIS,
M. DCC. LVII.

TABLE
TITRE PREMIER.
TITRE II.

40-1. Du Chesne, ***Code de la police, ou analyse des reglemens de police, divisé en douze titres,*** **Paris: Prault, 1757.**


CODE
DE LA POLICE,
OU
ANALYSE
DES RÉGLEMENS DE POLICE,
Divisé en douze Titres.
Troisiéme Edition revue, corigée, augmentée & mise en deux Parties.
A PARIS,
M. DCCLXI.
A MONSIEUR
DE TOURNY,
CONSEILLER D'ETAT.
MONSIEUR,

40-2. Du Chesne, ***Code de la police, ou analyse des réglemens de police, divisé en douze titres, Troisiéme edition revue, corigée, augmentée & mise en deux parties,*** **Paris: Prault, 1761.**

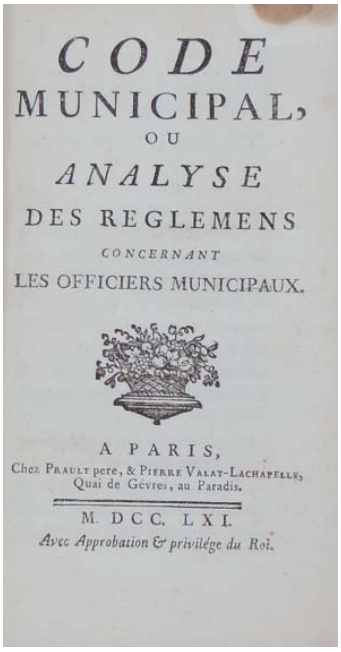
ドュ・シェーヌ著『ポリス法典あるいはポリス規則概要』（パリ、初版、1757（左）;増補第三版、1761（右））。地方でポリスの実務に携わる人びと用にドラマールの『ポリス提要』を圧縮、編纂したハンドブック。当初ドラマールは一二の領域を扱う構想を持ち膨大な史料（現在のフランス国立図書館手稿部のドラマール文書）を集めていたが、実際に出版にこぎ着けたのは半分の領域についてのみであった。他方、ドュ・シェーヌはドラマールの構想通りに一二の領域を扱っている点でも興味ぶかい。前半は、簡潔な説明、後半は関連する重要王令などが収録されており、アンシアン・レジームの人びとの日常にどのような権力関係がはりめぐらされていたかを教えてくれる。著者ドュ・シェーヌは、シャンパーニュ地方の一都市の警察代官であった。（NT）

DICTIONNAIRE
OU
TRAITÉ DE LA POLICE
GENERALE
DES VILLES, BOURGS, PAROISSES
ET SEIGNEURIES DE LA CAMPAGNE.
A PARIS,
M. DCC. LVIII.

TABLE
ALPHABETIQUE
DU DICTIONNAIRE ET TRAITÉ DE POLICE,
ET DES OBJETS QU'IL CONTIENT.

41. Edme de La Poix de Freminville, ***Dictionnaire ou traité de la police génerale des villes, bourgs, paroisses et seigneuries de la campagne,*** **Paris: Gissey, 1758.**

エドム・ド・ラポワ・ド・フレマンヴィル著『地方の都市・町・教区、領主領の包括的ポリス事典あるいは提要』（パリ、1758）。ドラマールの『ポリス提要』が主に大都市パリのポリスを扱った四巻の大型本であるのに対し、地方都市や教区でポリス実務に携わる読者の便のために、四つ折り版一冊にまとめられた手引き書である。『ポリス提要』出版後の法や規則を収録し、内容もアルファベット順に簡潔にまとめられている。当時のポリスの管轄領域の広さに応じて、内容は宗教、司法、公共の安全と清掃、技術工芸など多岐にわたる。著者フレマンヴィルは、ラ・パリス侯爵領の代官であった。（NT）

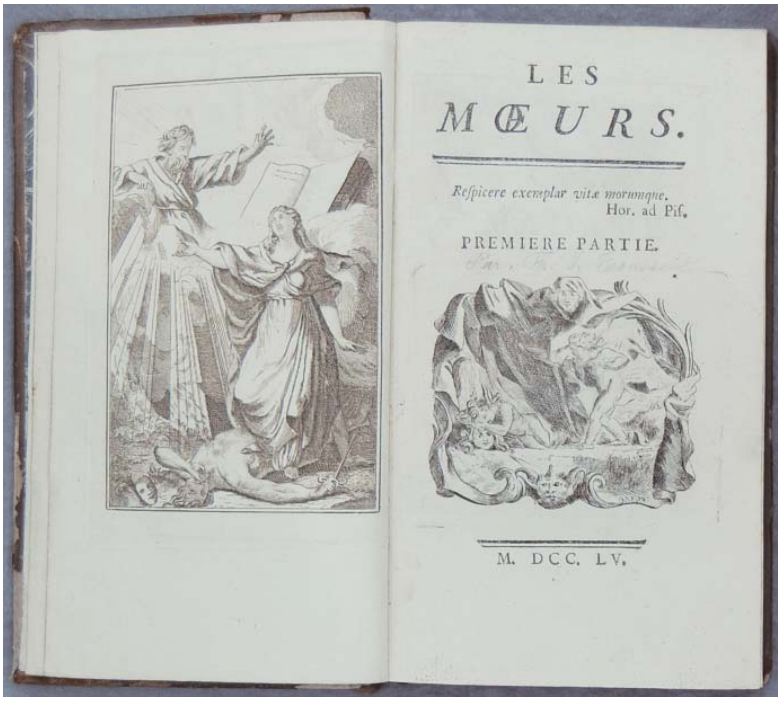

CODE
MUNICIPAL,
OU
ANALYSE
DES REGLEMENS
CONCERNANT
LES OFFICIERS MUNICIPAUX.

A PARIS,
Chez PRAULT pere, & PIERRE VALAT-LACHAPELLE,
Quai de Gêvres, au Paradis.

M. DCC. LXI.
Avec Approbation & privilége du Roi.

42. *Code municipal, ou analyse des reglemens concernant les officiers municipaux,* Paris: Prault, 1761.

『都市法典、あるいは都市役人が関与する規則概要』（パリ、1761）。都市役人の任務遂行のために必要な法や規則の歴史をたどり、項目ごとにまとめた手引き書。一七世紀末から王権は、それまで各都市が自ら選出してきた都市役人職の売却と廃止を繰り返す。1733 年に新たに都市役職を売却し、新たな購入者が任務に就いたことが本書出版の背景であったと考えられる。徴税管区ごとに入市税の税率一覧が付されており、きわめて実用的である。著者の名前はないが、長年、市参事会のメンバーとしての経験を新参者に伝えるために執筆したと緒言にある。（NT）


LES
MŒURS.

Respicere exemplar vitæ morumque.
Hor. ad Pis.

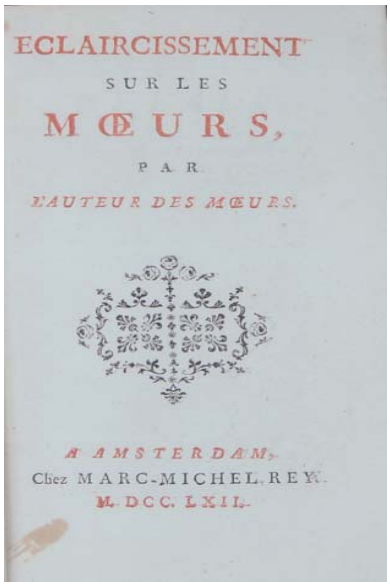
PREMIERE PARTIE.

M. DCC. LV.

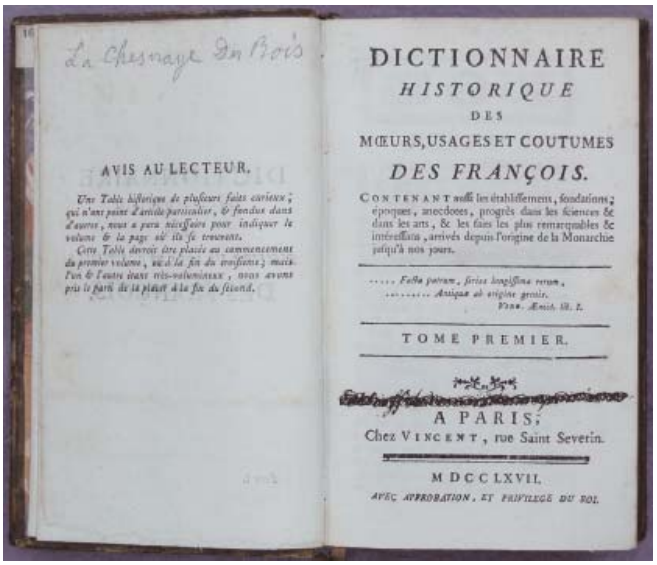
43. François-Vincent Toussaint, *Les mœurs,* 1755.

フランソワ＝ヴァンサン・トゥサン著『習俗論』（1755）。匿名かつ出版地と出版者の未記載で出版されたが、パリ高等法院の弁護士トゥサン（1715-1772）を著者とする。本書の初版は 1748 年。冒涜的かつスキャンダラスな書と受け止められ、高等法院から発禁処分を受ける。著者トゥサンは、1761 年にブリュッセルへの亡命を余儀なくされるのだが、その間も『百科全書』の多くの項目を執筆している。ベルリンで客死（かくし）。二宮夫妻が翻訳したロバート・ダーントン著『革命前夜の地下出版』（岩波書店、1994）が描くフィロゾーフの世界を垣間見せてくれる書物である。立川孝一と渡部望による邦訳は、『習俗』（国書刊行会、2001）に所収。（NT）

44. François-Vincent Toussaint, *Eclaircissement sur les mœurs,* Amsterdam: Chez Marc-Michel Rey, 1762.


ECLAIRCISSEMENT
SUR LES
MŒURS,
PAR
L'AUTEUR DES MŒURS.
A AMSTERDAM,
Chez MARC-MICHEL REY.
M. DCC. LXII.

フランソワ＝ヴァンサン・トゥサン著『習俗論に関する釈明』（アムステルダム、1762）。本書にも著者の実名はないが、『習俗論』の著者による、との表記がある。『習俗論』が無神論的である、との批判に応えた書。二宮は、歴史上の偉人や大思想家からではなく、「からだ」と「こころ」を備えた人間がどのようにきずなを結びあうかという観点から過去の社会を読み解こうとした（「参照系としてのからだとこころ――歴史人類学試論」、岩波書店刊『二宮宏之著作集』第三巻（2011）所収）。市井の人びとを生き生きと描いたトゥサンへの関心も、一啓蒙思想家への関心に留まらず、日常的な習俗の次元の重要性に着目していたためと思われる。（NT）


La Chesnaye Des Bois

AVIS AU LECTEUR.

Une Table historique de plusieurs faits curieux, qui n'ont point d'article particulier, & fondus dans d'autres, nous a paru nécessaire pour indiquer le volume & la page où ils se trouvent.

Cette Table devroit être placée au commencement du premier volume, ou à la fin du troisieme; mais l'un & l'autre étant très-volumineux, nous avons pris le parti de la placer à la fin du second.

DICTIONNAIRE
HISTORIQUE
DES
MŒURS, USAGES ET COUTUMES
DES FRANÇOIS.

CONTENANT outre les établissemens, fondations, époques, anecdotes, progrès dans les sciences & dans les arts, & les faits les plus remarquables & intéressans, arrivés depuis l'origine de la Monarchie jusqu'à nos jours.

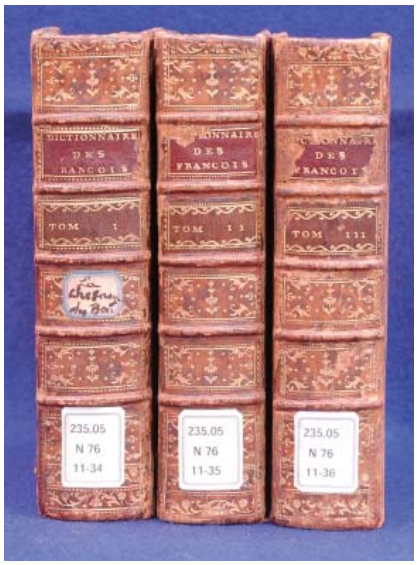
..... Fabla patrum, sirius longissima rerum,
..... Antiquæ ab origine gentis.
Virg. Æneid. lib. I.

TOME PREMIER.

A PARIS,
Chez VINCENT, rue Saint Severin.

M DCC LXVII.

AVEC APPROBATION, ET PRIVILEGE DU ROI.



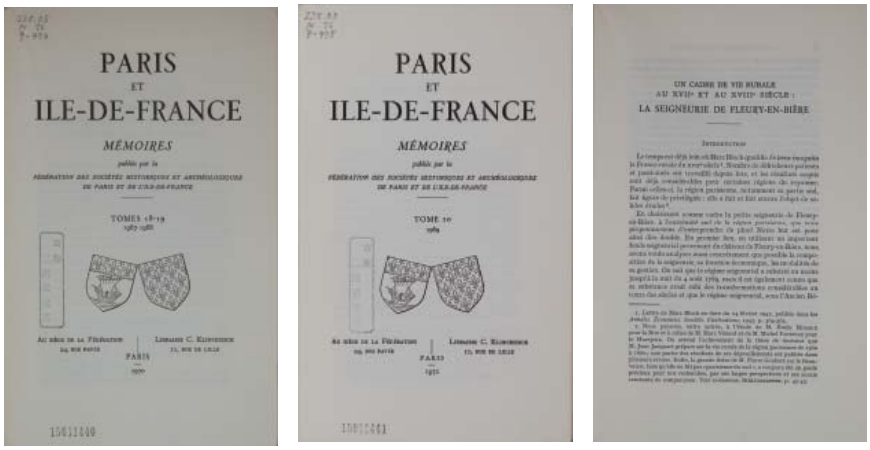
45. François-Alexandre Aubert de La Chesnaye Des Bois, *Dictionnaire historique des mœurs, usages et coutumes des François,* 3 vols., Paris: Chez Vincent, 1767.

フランソワ＝アレクサンドル・オベール・ドラシェネ・デボワ著『フランス人の習俗・習慣・慣習に関する歴史事典』（全三巻、パリ、1767）。著者オベール・ドラシェネ（1699-1783）は元修道士の著述家。四〇年以上にわたり博物学、軍事、貴族家門、食物など幅広い分野について驚異的な数の書物、事典を著す。本書は、祖先の習俗や制度などを歴史的に逸話を交えて解説しているが、豊富な歴史的知識をアルファベット順に事典形式でまとめた点に特徴がある。二宮の論文「七千人の捨児――十八世紀のパリ考現学」（岩波書店刊『二宮宏之著作集』第二巻（2011）所収）に登場する「捨児養育院」についても、歴史を丁寧に辿った記述がある。（NT）

第五章　『マルク・ブロックを読む』
——土地から村、村から村人へ、あるいは歴史家の晩年の仕事（メチエ）

二宮宏之の最後の著作は、『マルク・ブロックを読む』（岩波書店、2005）だった。二宮はフランス史の勉強を始めた当初からブロックの名を知り、二〇世紀を代表するこの歴史家の豊かな構想力と緻密な論理構成に惹かれていった。1960年から1966年のフランス留学期間に、二宮はパリ地方南端の農村を対象とした研究を行った。フランス語論文としてまとめられたこの研究は、渡仏以前の日本で主流だったマルクス主義史観にもとづく社会構成史とは異なり、「生きた人間」を対象とするものだった。二宮は自身でそれを、「土地から村、村から村人へ」と表現した。これは、ブロック以来のフランス社会史研究の視点と方法を取り入れた成果であった。フランス留学から戻った二宮は、『全体を見る眼と歴史家たち』（木鐸社、1986）、『歴史学再考』（日本エディタースクール出版部、1994）にまとめられることになるすぐれた論文を発表していった。これらの論文は、つねに歴史家たち——西洋史のみならず日本史や東洋史研究者からも——の注目の的であった。

今になって振り返ってみれば、そうした仕事を経て最後に取り組んだのがブロックであったのは、何か運命的なものを感じる。だが、結果としては実現できなかったものの、『マルク・ブロックを読む』の筆をとりながら、二宮はさらなる研究計画を抱いていた。かつてブロックに導かれて取り組んだ農村史研究を、フランスで史料調査を行いながら発展させることである。ブルゴーニュ地方の農村家族の研究、そして、パリの北に拡がるショワジー＝オ＝ブという農村地帯を対象にした研究……。しかし、その希望は叶うことはなかった。二宮はブロックを「歴史学の革新のために全力をつくした歴史家」と述べているが、二宮自身を評するにもこれ以上にふさわしい表現はないように思われる。（SH）



46. Hiroyuki Ninomiya, « Un cadre de vie rurale au XVIIe et au XVIIIe siècle: la seigneurie de Fleury-en-Bière », in *Paris et Ile-de-France, Mémoires,* t. 18-19, 1970; t. 20, 1972.

パリ南方五〇キロのフルーリ＝アン＝ビエール領主領の社会経済史的研究（全二部）。二宮は敬愛する恩師ジャン・ムーヴレのパリ・オルロージュ街の居宅にしばしば招かれて、研究者仲間との談笑に加わるとともに、指導を受けた。フランス語で執筆されたこの論文は、領主関係資料、県文書館史料、公証人記録・教区簿冊を渉猟（しょうりょう）し、領主領と村の生活を明らかにした。非常に高い評価を受ける。二宮は、かつての研究に、人間が生きている世界を描く農村史をつなげ得た喜びを語ったことがある。左図は第一部掲載誌の標題紙、中央図は第二部掲載のそれ、右図は第一部書き出し。なお、実弟の二宮正之氏による邦訳は、「一七・一八世紀における農村生活の一実態——フルーリ＝アン＝ビエールの領主領」として岩波書店刊『二宮宏之著作集』第四巻（2011）に所収。（MN）

COUTUME
DU BAILLIAGE
DE MELUN,
ANCIENS Ressorts & Enclaves d'icelui, suivant la Réformation accordée en l'Assemblée des trois Etats dudit Bailliage, au mois d'Avril mil cinq cent soixante.
AVEC des observations nouvelles, où l'on a renfermé tout ce qui a paru nécessaire pour faire connoître le sens & l'application des articles, les maximes admises par l'usage du Palais, & les derniers progrès de la Jurisprudence. On y a joint une conférence des Coutumes voisines, & spécialement de celle de Paris.
Par Me LOUIS-ALPHONSE SEVENET, Avocat en Parlement, & Notaire au Châtelet de Melun.
Ex magnis voluisse sat est.
Prix 10 liv. relié.
A PARIS,
Chez Gogué, Libraire, Quai des Augustins, près le Pont Saint Michel.
M. D. CC. LXXVII.
AVEC APPROBATION ET PRIVILEGE DU ROI.

47. Louis-Alphonse Sevenet, *Coutume du bailliage de Melun,* Paris: Chez Gogué, 1777.

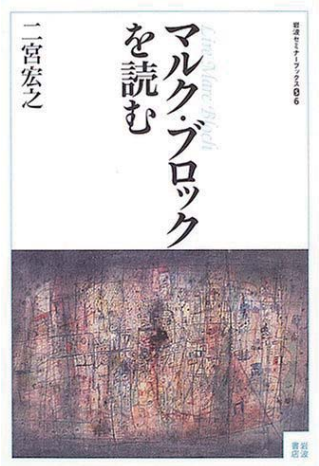
『ムラン国王裁判所管区の慣習法』（パリ、1777）。中世末以降、王権は各地の慣習法の成文化を国王裁判所管区ごとに行うよう命じた。また、時代が下るにつれて生じる社会状況との食い違いは、改訂によって補われることになった。そのようにして成文化されたものをムランの公証人やパリ高等法院弁護士を務めたスヴネ（生歿年不詳）が刊行したのが本書。

若い日のフランス留学中に二宮が研究対象として選んだのは、パリ地域南端に位置するフルーリ＝アン＝ビエールという土地であったが、ここはムランの国王裁判所管区内にあったから、座右の書であったはずである。（SH）

48. Arthur-Michel de Boislisle, *Mémoire de la généralité de Paris,* Paris: Impr. nationale, 1881 (Collection de documents inédits sur l'histoire de France).

MÉMOIRES DES INTENDANTS
SUR
L'ÉTAT DES GÉNÉRALITÉS
DRESSÉS POUR L'INSTRUCTION
DU DUC DE BOURGOGNE.
TOME I.
MÉMOIRE DE LA GÉNÉRALITÉ DE PARIS,
PAR A. M. DE BOISLISLE,
PARIS.
IMPRIMERIE NATIONALE.

歴史家ボアリール（1835-1908）による『パリ管区地方長官報告書』（パリ、1881）。絶対王政の地方行政の軸となった国王直轄官僚である地方長官による任地についての報告書を収めた史料集。二宮がフランス留学中に研究対象とした村はこの管区内にあった。一九世紀は、史料にもとづいた事実確定を重視する学問としての歴史研究がヨーロッパで形成され発展する時期で、そうした歴史学の基礎となる史料の編纂（へんさん）、刊行も盛んに行われた。二宮は、この『報告書』を史料刊行の模範と評価していた。当時公教育大臣だったフランソワ・ピエール・ギヨーム・ギゾー（1787-1848）の肝煎りで1835年に刊行が始まった「フランス史未公刊史料集成」シリーズの一巻。（SH）



49. 二宮宏之、『マルク・ブロックを読む』、岩波書店、2005.

マルク・ブロック（1886-1944）は、卓越したヨーロッパ中世史家であり、その著作は『フランス農村史の基本性格』（創文社、1959）、『封建社会』（みすず書房、1973-1977；岩波書店、1995）、『王の奇跡』（刀水書房、1998）など、日本語にも翻訳されている。彼はまた、リュシアン・フェーヴル（1878-1956）とともに1920年代末に雑誌『アナール』を創刊して「社会史」の旗を掲げ、歴史学という学問のあり方に大きな変革をもたらし、その影響は、現代日本の歴史学にも間接的に及んでいる。そして、彼は、ナチス・ドイツ占領下において、非合法のレジスタンス運動に加わり、逮捕され銃殺されるという悲劇的な死をとげたことから、日本でも終戦直後から知識人の間でよく知られていた人物でもある。

二宮はブロックについてたびたび論じていて、それらは、岩波書店刊『二宮宏之著作集』に「マルク・ブロックへの共感」としてまとめられているが（第五巻所収）、本書は、1998年に行われた岩波市民セミナーでの講義をもとに書き下ろされた。そうした経緯もあって、本書は話し言葉の文体で書かれている。そのために、ブロックについて論じられているのだが、語り手である二宮の存在もつねに意識されるのが、本書の魅力のひとつと言ってよいだろう。2016年には、岩波現代文庫版も刊行されている。（SH）

掲載資料一覧

NO.	資料名	請求記号
1	Antoine François Prévost, *Manuel lexique, ou Dictionnaire portatif des mots françois dont la signification n'est pas familiere a tout le monde*, 2 vols., Paris: Chez Didot, 1755.	235.05-N76/ 貴
2	Abbé Duclos, *Dictionnaire bibliographique, historique et critique des livres rares, précieux, singuliers, curieux, estimés et recherchés*, 3 vols., Paris: Chez Cailleau et fils, 1790	235.05-N76/ 貴
3	Marc Bloch, *Les caractères originaux de l'histoire rurale française*, Paris: Armand Colin, 1952.	235.05-N76
4	Paul Raveau, *L'agriculture et les classes paysannes*, Paris: Librairie des sciences politiques et sociales, 1926.	235.05-N76
5	Jean Meuvret, *Études d'histoire économique*, Paris: Armand Colin, 1971.	特別出展
6	Albert Soboul, *Les campagnes Montpelliéraines à la fin de l'Ancien Régime*, La Roche-Sur-Yon: Imprimerie Henri Potier, 1958.	235.05-N76
7	Albert Soboul, *La civilisation et la Révolution française II*, Paris: Arthaud, 1982.	235.05-N76
8	Albert Soboul, *Portraits de révolutionnaires*, Paris: Messidor/Éditions sociales, 1986.	235.05-N76
9-1	Pierre Goubert, *L'Ancien Régime*, t. I, Paris: Armand Colin, 1969.	235.05-N76
9-2	Pierre Goubert et Daniel Roche, *Les Français et l'Ancien Régime*, 2 vols., Paris: Armand Colin, 1984.	235.05-N76
10	Robert Mandrou, *Introduction à la France moderne (1500-1640): essai de psychologie historique*, Paris: Albin Michel, 1974.	特別出展
11	Robert Mandrou, *De la culture populaire aux XVIIe et XVIIIe siècles: la Bibliothèque bleue de Troyes*, Paris: Stock, 1964.	235.05-N76
12	ジャック・ルゴフほか、『歴史・文化・表象——アナール派と歴史人類学』、二宮宏之編訳、岩波書店、1992.	201-L52
13	Jacques Le Goff, *Pour un autre Moyen Âge: temps, travail et culture en Occident*, Paris: Gallimard, 1977.	235.05-N76
14	Jacques Le Goff, *La naissance du purgatoire*, Paris: Gallimard, 1981.	235.05-N76
15	Jacques Le Goff, *La civilisation de l'Occident médiéval*, Paris: Flammarion, 1982.	特別出展
16	Jacques Le Goff, *L'imaginaire médiéval*, Paris: Gallimard, 1985.	235.05-N76
17	Maurice Agulhon, *Pénitents et francs-maçons de l'ancienne Provence*, Paris: Fayard, 1984.	235.05-N76
18	Pierre Deyon, *Le mercantilisme*, Paris: Flammarion, 1969.	235.05-N76
19	Jean-Louis Flandrin et Massimo Montanari, éd., *Histoire de l'alimentation*, Paris: Fayard, 1996.	235.05-N76
20	Jean-Louis Flandrin et Jane Cobbi, éd., *Tables d'hier, tables d'ailleurs*, Paris: Odile Jacob, 1999.	235.05-N76
21	ジョルジュ・リヴェ、『宗教戦争』、二宮宏之・関根素子訳、白水社、1968.	085-B89
22	ジョルジュ・ルフェーヴル、『革命的群衆』、二宮宏之訳、岩波書店、2007.	081-I95
23	ロバート・ダーントン、『革命前夜の地下出版』、関根素子・二宮宏之訳、岩波書店、1994.	235.06-D42
24	Michel Sauvageau, *Coûtumes de Bretagne*, Rennes: J. Vatar, 1742.	235.05-N76/ 貴
25	*Finances (Encyclopédie méthodique, ou par ordre de matières, par une société de gens de lettres, de savans et d'artistes)*, 3 vols., Paris: Chez Panckoucke; Liège: Chez Plomteux, 1784, 1785, 1787.	235.05-N76/ 貴
26	Charles-Joseph Mayer, *Des États généraux, et autres assemblées nationales*, tome 1-18, The Hague; Paris: Chez Buisson, 1788-1789.	235.05-N76/ 貴
27	*Détails authentiques, relatifs à la tenue des Etats-Généraux; en 1614, au commencement de la majorité de Louis XIII*, London; Paris: Chez Knapen & fils, 1788.	235.05-N76/ 貴

NO.	資料名	請求記号
28	Mathieu-François Pidansat de Mairobert et Barthélemy François Joseph Mouffle d'Angerville, *Journal historique de la révolution opérée dans la constitution de la monarchie françoise,* par M. de Maupeou, chancelier de France, 7 vols., London, 1776.	235.05-N76/ 貴
29	*Almanach royal, année commune M. DCC. LXXXIX*, Paris: Chez la veuve d'Houry & Debure, 1789.	235.05-N76/ 貴
30	Jacques Necker, *De la Revolution françoise*, 2 vols., 1796.	235.05-N76/ 貴
31	Charles Loyseav, *Cinq livres dv droict des offices, avec le livre des seignevries, et celvy des ordres*, Paris: Chez la Veuve Abel l'Angelier, 1613.	235.05-N76/ 貴
32	Clavde Ioly, *Les œvvres de maistre Charles Loyseav, advocat en parlement*, Paris: Chez la Veuve de Gervais Alliot & Gilles Alliot, 1666.	235.05-N76/ 貴
33	Antoine Favvelet-dv-Toc, *Histoire des secretaires d'estat, contenant l'origine, le progrès, et l'etablissement de levrs charges*, Paris: Chez Charles de Sercy, 1668.	235.05-N76/ 貴
34	Jacques Savary, *Le parfait negociant*, Paris: Chez les Freres Estienne, t. I, 1757; t. II, 1753.	235.05-N76/ 貴
35	Pierre Neron et Estienne Girard, *Les edicts et ordonnances des tres-chrestiens roys, François I. Henry II. François II. Charles IX. Henry III. Henry IV. Lovys XIII. et Lovys XIV*, Paris: Chez Theodore Girard, 1666.	235.05-N76/ 貴
36	Theodore Godefroy et Denys Godefroy, *Le ceremonial françois*, 2 vols., Paris: Chez Sebastien & Gabriel Cramoisy, 1649.	235.05-N76/ 貴
37	二宮宏之、『二宮宏之著作集』全五巻、岩波書店、2011.	208-N76
38	Pons-Augustin Alletz, *Cérémonial du sacre des rois de France*, Paris: Chez G. Desprez, 1775.	235.05-N76/ 貴
39	Nicolas de La Mare, *Traité de la police*, t. I et II, Amsterdam: Aux dépens de la Compagnie, 1729; *Continuation du Traité de la police*, Paris: Jean-François Hérissant, 1738.	特別出展
40-1	Du Chesne, *Code de la police, ou analyse des reglemens de police, divisé en douze titres*, Paris: Prault, 1757.	235.05-N76/ 貴
40-2	Du Chesne, *Code de la police, ou analyse des réglemens de police, divisé en douze titres, Troisiéme edition revue, corigée, augmentée & mise en deux parties*, Paris: Prault, 1761.	
41	Edme de La Poix de Freminville, *Dictionnaire ou traité de la police génerale des villes, bourgs, paroisses et seigneuries de la campagne*, Paris: Gissey, 1758.	235.05-N76/ 貴
42	*Code municipal, ou analyse des reglemens concernant les officiers municipaux*, Paris: Prault, 1761.	235.05-N76/ 貴
43	François-Vincent Toussaint, *Les mœurs*, 1755.	235.05-N76/ 貴
44	François-Vincent Toussaint, *Eclaircissement sur les mœurs*, Amsterdam: Chez Marc-Michel Rey, 1762.	235.05-N76/ 貴
45	François-Alexandre Aubert de La Chesnaye Des Bois, *Dictionnaire historique des mœurs, usages et coutumes des François*, 3 vols., Paris: Chez Vincent, 1767.	235.05-N76/ 貴
46	Hiroyuki Ninomiya, « Un cadre de vie rurale au XVIIe et au XVIIIe siècle: la seigneurie de Fleury-en-Bière », in *Paris et Ile-de-France, Mémoires*, t. 18-19, 1970; t. 20, 1972.	235.05-N76
47	Louis-Alphonse Sevenet, *Coutume du bailliage de Melun*, Paris: Chez Gogué, 1777.	235.05-N76/ 貴
48	Arthur-Michel de Boislisle, *Mémoire de la généralité de Paris*, Paris: Impr. nationale, 1881 (Collection de documents inédits sur l'histoire de France).	235.05-N76
49	二宮宏之、『マルク・ブロックを読む』、岩波書店、2005.	289-B58

＊附属図書館の貴重書は、請求記号の末尾に「/ 貴」と示した。

二宮宏之・略年譜

1932年（昭和7）	5月	16日、東京府荏原（えばら）郡松澤村（現東京都世田谷区松原）にて出生。
1948年（昭和23） 16歳	4月	東京都立第六新制高等学校に入学（1950年に新宿高等学校と改称）。在学中には、大塚久雄、高橋幸八郎、エンゲルス、マルクス、杉本栄一、服部之総、丸山真男などを読む。
1951年（昭和26） 19歳	4月	東京大学文科一類に入学。在籍中には、大塚史学、高橋史学の読書に加え、小松芳喬、堀江英一、増田四郎などを読む。東京大学社会科学研究所所属の高橋幸八郎の講義を聴講する。
1952年（昭和27） 20歳	8月	マルク・ブロックの『フランス農村史の基本性格』原書第二版（1952年刊行）を入手し、熟読する。
1953年（昭和28） 21歳	4月	東京大学文学部西洋史学科に進学。同期に、遅塚忠躬（フランス史）、直居淳（ドイツ史）がいた。当時の助手は、思想史などにも通暁していた成瀬治（ドイツ史）であった。
1955年（昭和30） 23歳	3月	東京大学文学部西洋史学科を卒業。卒業論文「十六世紀フランスにおける借地経営の展開と借地農の存在形態」。当時の日本で参照できたフランスの史書は少なかったが、ポール・ラヴォーやピエール・グーベールの著作などに依拠して卒論を執筆。
	4月	東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程に入学。この頃、実兄・二宮敬の影響もあり、渡辺一夫のユマニスム研究に惹かれ、大塚久雄のプロテスタンティスム研究との間で揺れる。
1957年（昭和32） 25歳	3月	東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻修士課程を修了。修士論文「フランス絶対王政成立期の小作経営について」。
	4月	東京大学大学院人文科学研究科西洋史学専攻博士課程に進学。
1958年（昭和33） 26歳	8月	西洋史学専攻博士課程を退学。
	9月	東京大学文学部西洋史学科助手に就任。
1960年（昭和35） 28歳	2月	日仏歴史学会が発足。発足当時、事務担当を務める。
	8月	西洋史学科助手を休職。13日、フランス政府給費留学生として渡仏。直後に、国際歴史学会議第一一回大会（ストックホルム）に赴き、日本代表の高橋幸八郎を補佐。ストックホルムで、ジャン・ムーヴレに初めて会う。渡仏前に構想していた一六世紀研究は、留学生としての時間的制約や史料上の難点をムーヴレに指摘され、まず一七世紀から始めることに方針転換。留学先は、パリ大学文・人文学部と高等研究院第六部門。指導教授は、両校の教授を務めるエルネスト・ラブルースに依頼。
	10月	ラブルースの示唆により、フランス中央部ムランにあるセーヌ＝エ＝マルヌ県文書館を調査。ムーヴレの同意を得て、フルーリ＝アン＝ビエール領主領の研究を開始。ムーヴレから史料の解読などについて懇切な指導を受ける。高等研究院では、ムーヴレ、グーベール、ロラン・ムーニエ、ラブルースらの演習に出席。
1963年（昭和38） 31歳	8月	東京大学文学部西洋史学科助手を辞任。
	9月	フランス国立史料館外国人研究員に就任。
1965年（昭和40） 33歳	8月	23-27日、第三回国際経済史学会（ミュンヘン）に参加。ムーヴレの部会「農村経済の生産と生産性」の運営を手伝う。29日-9月5日、国際歴史学会議第一二回大会（ウィーン）に参加。日本代表の高橋幸八郎を補佐。
1966年（昭和41） 34歳	3月	フランス語論文「一七・一八世紀における農村生活の一実態――フルーリ＝アン＝ビエールの領主領」第一部を脱稿。フランス国立史料館外国人研究員を辞任。18日、帰国。
	4月	東京外国語大学外国語学部助教授に就任。
1968年（昭和43） 36歳	2月	ジョルジュ・リヴェ『宗教戦争』を関根素子との共訳で白水社より刊行。
	10月	フランス政府派遣文化使節としてムーヴレが来日。26日、土地制度史学会秋季大会において講演「一七世紀フランスにおける土地所有と経営」を行う。その要旨は二宮による「補説」が加えられたうえで『土地制度史学』四二号に掲載された。以後、フランス大使館文化部、日仏会館、学術会議によるフランス人・フランス史研究者の日本招聘に関わる。
1970年（昭和45） 38歳	3月	『パリおよびイール＝ド＝フランス』誌一八・一九合併号に掲載予定の論文「一七・一八世紀における農村生活の一実態」第一部の校正刷が届く。
	7月	「一七・一八世紀における農村生活の一実態」第二部を脱稿、ムーヴレに送る。
1972年（昭和47） 40歳	10月	「一七・一八世紀における農村生活の一実態」第二部が『パリおよびイール＝ド＝フランス』誌二〇号に掲載される。ロベール・マンドルーが来日。「アンシアン・レジームにおける政治と社会心理――魔女裁判問題を中心として」などの講演を行う。
1973年（昭和48） 41歳	8月	「「印紙税一揆」覚え書――アンシアン・レジーム下の農民叛乱」（岡田与好編『近代革命の研究』上、東京大学出版会）を発表。
1975年（昭和50） 43歳	10-11月	ピエール・グーベールが来日。11月11日、東京大学において講演「一八世紀フランスにおける放浪・乞食・犯罪についての諸研究」を行う。
1976年（昭和51） 44歳	9月	ジャック・ルゴフが来日。29日、東京日仏会館において講演「歴史学と民族学の現在」を行い、二宮が通訳を務める。その記録は『思想』六三〇号（岩波書店）に訳載され、日本における社会史研究に大きな影響を与えた。
1977年（昭和52） 45歳	4月	アルベール・ソブールが来日。21日、学士会館分館（本郷）において講演「フランス革命と平等の問題」を行う。
	5月	日本西洋史学会第二七回大会に参加、「フランス絶対王政の統治構造」について報告（吉岡昭彦・成瀬治編『近代国家形成の諸問題』（木鐸社、1979）に所収）。
	7月	東京外国語大学外国語学部教授に昇任。

1977年（昭和52）45歳	10月	文部省海外研修にて渡仏（1979年3月まで）。滞在中は、社会科学高等研究院（高等研究院第六部門が独立して設立）のアンドレ・ビュルギエール、ダニエル・ロッシュ、ロジェ・シャルチエらの演習に出席。ボーヴェにあるオワーズ県文書館、パリ国立文書館などで調査に従事。ブルターニュで印紙税一揆関係の現地調査も行う。
1980年（昭和55）48歳	10月	ピエール・デイヨンが来日。4日、社会経済史学会第四九回大会において講演「「原基的工業化」モデルの意義と限界」を行う。その記録は二宮によって『社会経済史学』四七巻一号に訳載された。
1981年（昭和56）49歳	2月	「七千人の捨児――十八世紀のパリ考現学」（『月刊百科』二二一号、平凡社）を発表。
1982年（昭和57）50歳	10月	ジョルジュ・ルフェーヴル『革命的群衆』の翻訳を創文社より刊行。
1983年（昭和58）51歳	10-11月	エマニュエル・ルロワ＝ラデュリーが来日。11月7日、東京日仏会館において講演「歴史家の領域」を行う。その記録は二宮によって『思想』七二八号（岩波書店）に訳載された。また、二宮によるインタヴューも行われた。
1984年（昭和59）52歳	4月	東京大学文学部において一年間「ドラマールを読む」と題する講義を行う。
	6月	モーリス・アギュロンが来日。20日、東京日仏会館において講演「フランス政治史におけるイメージとシンボルの役割」を行う。
1985年（昭和60）53歳	3月	14日、国立民族学博物館の共同研究「民族とは何か」第三回研究会に参加。「参照系としてのからだとこころ――歴史人類学試論」として刊行される報告などを行う。
	11-12月	渡仏。コレージュ・ド・フランスにおいて四回連続講義「フランスと日本――二つの旧体制の比較考察」を行う。グーベール、ルロワ＝ラデュリーほか多数が聴講。
1986年（昭和61）54歳	12月	『全体を見る眼と歴史家たち』を木鐸社より刊行。
1988年（昭和63）56歳	9月	ロベール・マンドルー『民衆本の世界――17・18世紀フランスの民衆文化』を長谷川輝夫との共訳で人文書院より刊行。
	12月	ビュルギエールが来日。15日、東京日仏会館において講演「ポスト・モダンと歴史学の危機」を行う。
1989年（昭和64・平成元）57歳	11月	11日、史学会第八七回大会（創立百周年記念大会、東京大学）において講演「王の儀礼――フランス絶対王政」を行う。日仏歴史学会会長に就任（1999年3月まで）。
1992年（平成4）60歳	12月	ルゴフらの講演を集成した『歴史・文化・表象――アナール派と歴史人類学』を岩波書店より刊行。
1993年（平成5）61歳	4月	東京外国語大学附属図書館長に就任（1995年3月まで）。
	10月	ロバート・ダーントンが来日。「誹謗文書と革命のイデオロギー起源」などの講演を行う。
1994年（平成6）62歳	1月	『歴史学再考――生活世界から権力秩序へ』を日本エディタースクール出版部より刊行。
	3月	ダーントンの『革命前夜の地下出版』を関根素子との共訳で岩波書店より刊行。
1995年（平成7）63歳	3月	東京外国語大学を定年退職。
	4月	電気通信大学電気通信学部教授に就任。
	8月	国際歴史学会議第一八回大会（モントリオール）に参加、理事に就任。
	11月	『全体を見る眼と歴史家たち』増補版を平凡社より刊行。
1997年（平成9）65歳	3月	電気通信大学を退職。
	4月	フェリス女学院大学国際交流学部教授に就任。
	6月	ロジェ・シャルチエが来日。11日、東京日仏会館において講演「歴史・言語・プラティック」を行う。
1998年（平成10）66歳	10月	岩波市民セミナーにおいて五回連続講義「マルク・ブロックを読む」を行う。
1999年（平成11）67歳	2月	4日、国立公文書館専門職員養成課程において講演「諸外国の公文書館」を行う。
2000年（平成12）68歳	8月	国際歴史学会議第一九回大会（オスロ）に参加。この年にて理事を退任。
	10月	ビュルギエール、イヴ＝マリ・ベルセ、ドニ・クルゼが来日。7-8日、日仏学術シンポジウム「アンシアン・レジーム期フランスの国家と社会」（東京日仏会館）に三氏とともに参加。
2003年（平成15）71歳	3月	フェリス女学院大学を健康悪化のため依願退職。
2005年（平成17）73歳	3月	『マルク・ブロックを読む』を岩波書店より刊行。
	6月	これまでの研究のまとめの意味で論文集『フランス アンシアン・レジーム論――社会的結合・権力秩序・叛乱』の構想を練る。
2006年（平成18）	3月	13日、永眠。
2007年（平成19）	3月	林田伸一の協力により『フランス アンシアン・レジーム論――社会的結合・権力秩序・叛乱』が岩波書店より刊行される。
2011年（平成23）	2-12月	『二宮宏之著作集』全五巻が岩波書店より刊行される。
2012年（平成24）	8月	筑波大学附属図書館に旧蔵洋書約九千冊が寄贈される。
2016年（平成28）	10-11月	2016年度筑波大学附属図書館特別展「歴史家 二宮宏之の書棚」が開催される。

＊ 本年譜は、『二宮宏之著作集』第五巻（岩波書店、2011）に収載の「二宮宏之著作年譜」に依拠して作成した。（YT）

企画

筑波大学大学院人文社会科学研究科

山田　博志（研究科長）

津崎　良典（准教授）

筑波大学附属図書館

西川　博昭（館長）

谷口　孝介（副館長・研究開発室長）

江川　和子（学術情報部長）

筑波大学附属図書館研究開発室

山澤　学（人文社会系准教授）

後援・資料提供

岩波書店

附属図書館特別展ワーキング・グループ

大久保　明美　（主査）

浅野　ゆう子

岩本　悠

奥村　洋子

木野村　和人

塩澤　美咲

清水　彩代

永濱　恵理子

廣田　直美

座談会

2016 年 10 月 21 日（金）　15:00 ～ 17:00

登壇者　林田　伸一（成城大学教授）

高澤　紀恵（国際基督教大学教授）

司会　津崎　良典（筑波大学准教授）

オフィシャル Web サイト

http://www.tulips.tsukuba.ac.jp/exhibition/2016nino/index.html

---

2016 年度　筑波大学附属図書館特別展

歴史家 二宮宏之の書棚

2016 年 10 月 11 日　発行

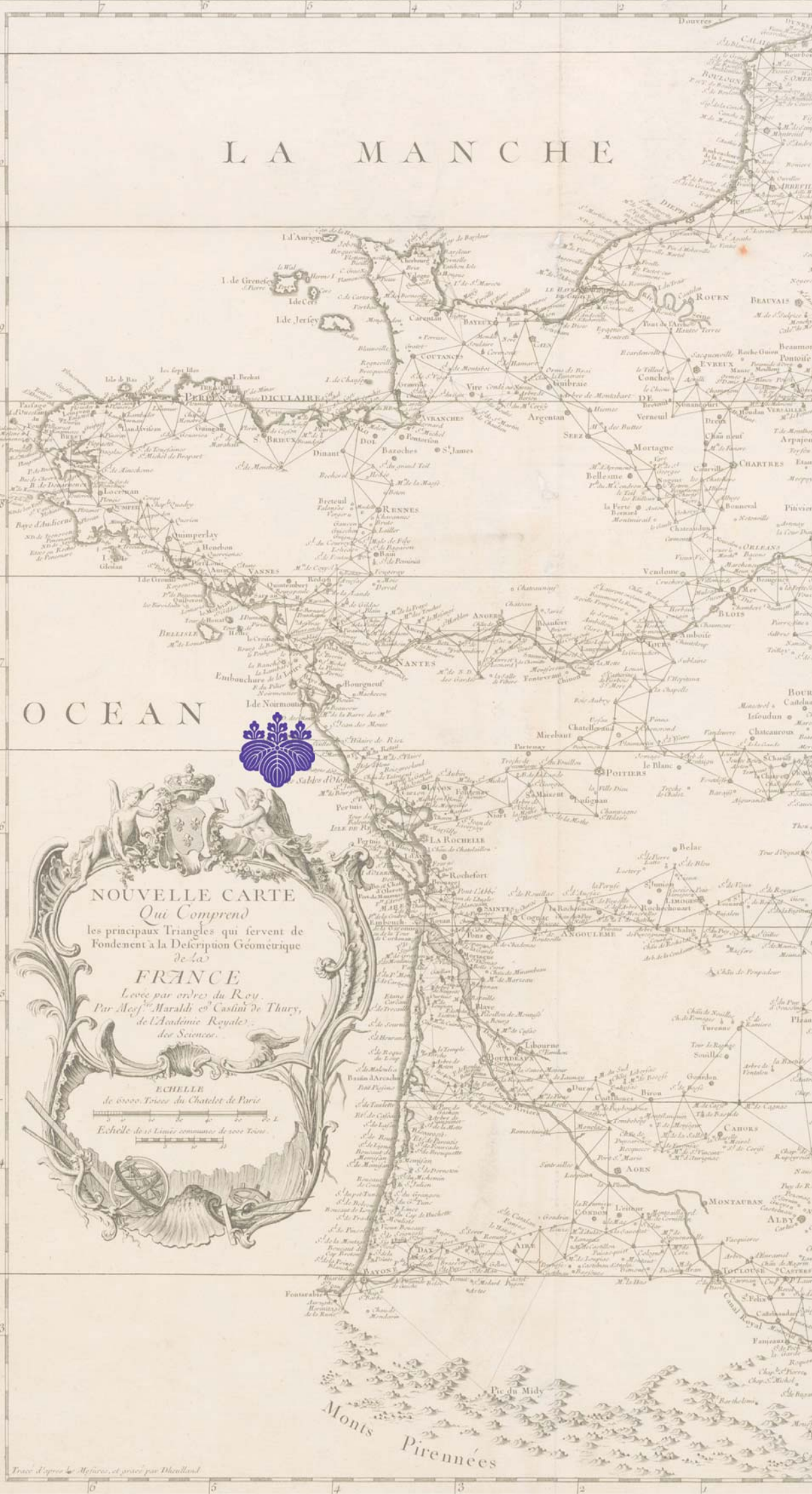
発行　筑波大学附属図書館 ©2016

〒 305-8577　茨城県つくば市天王台 1-1-1

TEL 029-853-2376

印刷　前田印刷株式会社

ISBN　978-4-924843-84-4

ETIQUE DES VILLES PRINCIPALES
DE LA FRANCE.

Noms des Villes	Longitude D. M. S.	Latitude D. M. S.	Distances à l'Méridien de Paris en Toises	Distances à l'Méridien de Paris en Lieues
Crauzon	2. 30. 34	48. 14. 53	162036	130
Creil	0. 8. 0	49. 16. 38	19734	16
Cremieu	2. 55. 18	46. 46. 50	111088	108
Crossic	4. 51. 40	47. 17. 40	120474	101
Dammartin	0. 10. 40	49. 3. 14	17740	8
Dax	2. 12. 10	43. 42. 10	201844	169
Decise	1. 8. 18	46. 50. 14	121097	80
Deivre	2. 32. 8	51. 40. 0	102142	83
Dieppe	1. 16. 40	49. 55. 17	77313	38
Digouin	1. 38. 40	46. 18. 55	148307	74
Dijon	0. 44. 17	47. 19. 21	184028	69
Dinant	4. 53. 10	48. 17. 18	166887	73
Dixmude	2. 31. 36	51. 2. 6	137083	83
Dole	3. 10. 0	47. 5. 45	130844	78
Dol	4. 6. 12	48. 33. 3	135398	77
Donchery	2. 34. 56	49. 46. 21	106671	78
Douay	0. 44. 47	51. 10. 10	91548	42
Douvres	1. 1. 3	51. 7. 45	133770	67
Dreux	0. 18. 30	48. 44. 17	37138	18
Druye	1. 6. 12	47. 18. 0	84025	42
Dun le Roy	0. 14. 6	46. 18. 4	111759	50
Dunkerque	0. 2. 13	51. 2. 4	123810	84
Duras	2. 4. 48	44. 44. 48	181874	112
Embrun	4. 5. 0	44. 34. 0	191081	148
Enfisheim	0. 1. 00	47. 51. 1	178618	78
Erften	0. 10. 14	48. 16. 10	110760	101
Estais	1. 0. 40	47. 30. 0	86037	46
Etaples	0. 44. 40	50. 30. 44	139776	48
Eu	0. 54. 50	50. 2. 50	77145	35
Evreux	1. 11. 11	49. 1. 54	40842	12
Fanjaux	0. 18. 9	43. 11. 17	204491	161
Fecamp	1. 18. 10	49. 46. 0	90188	42
Feurs	1. 10. 35	45. 44. 45	160776	98
Flavigny	1. 11. 3	47. 30. 47	114760	86
Fontarabie	4. 8. 7	43. 23. 10	384698	173
Fontenay	2. 8. 10	46. 23. 1	181497	90
Fontevrault	1. 18. 6	47. 10. 43	119147	84
Fort Louis	3. 44. 10	48. 48. 0	110443	117
Furnes	0. 19. 31	51. 4. 17	122174	84
Gaillardon	0. 53. 3	48. 31. 55	30089	12
Gap	3. 44. 12	44. 38. 5	183174	141
Geberfuir	4. 18. 14	48. 0. 11	194493	97
Gebwilliers	4. 50. 18	47. 14. 10	191732	96
Gengenbach	4. 40. 18	48. 14. 10	118697	107
Gien	0. 17. 45	47. 41. 5	96118	38
Gonneffe	0. 6. 41	48. 29. 45	96118	4
Gourdon	0. 29. 40	44. 44. 10	226833	112
Graffe	4. 56. 8	43. 39. 22	246697	173
Gray	3. 12. 53	47. 28. 14	147396	73
Granville	1. 37. 3	48. 50. 11	148416	74
Gravelines	0. 12. 18	50. 59. 4	111871	61
Grenoble	3. 13. 40	45. 11. 40	246030	123
Guerande	4. 46. 56	47. 18. 59	201882	100
Guibraie	1. 31. 39	48. 10. 37	96146	47
Guingam	1. 34. 6	48. 23. 40	127744	108
Guise	1. 17. 11	49. 53. 47	77196	38
Haguenau	3. 57. 18	48. 48. 48	109188	102
Ham	0. 44. 16	49. 44. 38	38903	18
Harfleur	1. 8. 33	49. 30. 13	78618	44
Hailat	4. 18. 30	48. 1. 8	194000	97
Havre de Grace	0. 14. 3	49. 19. 0	91037	48
Hennebon	1. 37. 37	47. 48. 1	111491	110
Hieres	3. 48. 11	43. 7. 13	369247	173
Honfleur	1. 6. 48	49. 18. 11	88668	40
Houdan	0. 44. 12	48. 47. 11	37820	18
Inferheim	4. 19. 0	48. 8. 8	183078	96
Ipres	2. 31. 33	50. 51. 5	116780	58
Issoires	0. 51. 11	45. 33. 56	150018	98
Issoudun	0. 50. 61	46. 58. 13	108854	94
Isturils	1. 47. 3	43. 21. 18	189776	60
Kintzenem	4. 18. 35	48. 5. 36	190213	96
la Charite	0. 41. 7	47. 10. 33	98801	49
la Chatres	0. 10. 16	46. 24. 14	129380	84
la Ciotat	3. 18. 32	43. 10. 30	348116	174
la Ferte Bern.	0. 41. 17	48. 11. 11	73795	36
la Mone S. J.	1. 37. 34	46. 19. 38	147603	73
la Rochelle	2. 31. 44	46. 9. 42	206110	103
Landau	3. 43. 30	49. 11. 38	119834	108
Laon	1. 17. 29	49. 33. 51	82618	34
Landivisean	6. 18. 30	48. 30. 40	240286	122
Langeais	1. 16. 10	47. 19. 31	110088	56
Langres	2. 19. 12	47. 51. 17	166016	103
Lanterbourg	6. 10. 30	48. 58. 11	129791	108
le Bourg	1. 18. 51	44. 31. 16	170182	138
le Croisy	1. 41. 51	51. 11. 11	84388	41
Leitour	1. 43. 7	43. 18. 1	187706	147
Lens	0. 19. 14	50. 27. 43	90776	46
le Puy	1. 33. 21	45. 2. 1	224476	112
le Quesnoy	1. 18. 17	50. 14. 47	98871	40
Leneven	6. 40. 40	48. 24. 10	182788	122
Lespare	3. 17. 3	43. 18. 33	128187	110
le S.t Esprit	2. 41. 18	44. 18. 30	170023	136
les Sables	4. 7. 18	46. 49. 51	107412	103
Libournes	2. 39. 18	44. 51. 1	142364	112
Licteuberg	5. 9. 55	48. 18. 11	138888	96
Lille	0. 44. 16	50. 39. 40	108970	80
Lion	2. 19. 43	48. 45. 11	110098	100
Loches	1. 21. 38	47. 7. 27	110188	88
Locornan	6. 38. 38	48. 5. 40	101897	128
Longwy	3. 16. 12	49. 31. 33	134411	63
Lorgues	4. 2. 18	43. 19. 31	344079	172
Lorient	3. 42. 32	47. 44. 34	118813	110
Lorris	0. 10. 40	47. 58. 40	84437	37
Lucon	3. 30. 34	46. 19. 14	191807	96
Luines	1. 47. 16	47. 18. 10	107188	55
Lunneville	4. 10. 6	48. 38. 33	107184	78
Lure	4. 10. 30	47. 41. 10	171484	86
Mallezais	3. 4. 48	48. 20. 50	182903	91
Marans	3. 22. 1	46. 18. 18	183174	90
Marcoues	3. 26. 53	48. 42. 10	107884	108